熊本国際建築展 くまもとアートポリス'96

山鹿 まちづくり展

YAMAGA CITYPLANNING EXHIBITION

KUMAMOTO
INTERNATIONAL
EXHIBITION
OF
ARCHITECTURE
KUMAMOTO
ARTPOLIS '96

K·A·P

CONTENTS

山鹿

KUMAMOTO INTERNATIONAL EXHIBITION OF ARCHITECTURE

KUMAMOTO ARTPOLIS '96

山鹿まちづくり展概要……1

プログラム……2

オープニングイベント……3

伝統と未来のまちづくり講演会……7

◆第一部　ディスカッション「わたしの国と日本」……8

◆第二部　講演「常田富士男のあったか話」……16

講師：常田富士男

まち並みウォッチングスタンプラリー……25

アートポリス参加作品パネル展、豊前街道絵画展　他……33

山鹿・鹿本地方の匠の技展……37

豊前街道寺子屋塾……39

概要

老人会の瓦一枚運動から始まった山鹿市民による八千代座の復活。その八千代座は92年、アートポリスの選定既存建造物に指定され、そして今、八千代座を中心とした豊前街道の宿場町の雰囲気を呼び起こそうと、まち並み保存が進められている。熊本県の建築士会山鹿支部が「町づくり景観研究部会」をつくり、「江戸・大正時代の建物を基本としたまちづくり」の構想を発表。眠っていた山鹿の宝がよみがえり始めた。

今回の「山鹿まちづくり展」は、まちづくりに対する山鹿市民への啓発や活動のきっかけになればと開催。日頃、見過ごしている山鹿の風景・豊前街道をじっくり見て回ることで、たくさんの市民や観光客が山鹿の良さを再認識した。まず、自分のまちを知り、そして考える。山鹿にしかない、山鹿ならではのまちを自分たちの手でつくる。今、市民あげてのまちづくりが始まった。

オープニングイベント

日時：平成8年10月12日(土) 15:30～
場所：お祭り広場・市民会館・豊前街道沿道
内容：屋台村（熊本うまかもん大集合）
鶴屋百貨店バトンクラブパレード（豊前街道～八千代座～お祭り広場）
写真コンテスト・景観賞表彰式
スッポン鍋の大盤振る舞い
熊本交響楽団コンサート
郷土芸能祭（山鹿太鼓、茶山唄おどり、山鹿灯篭踊り）

伝統と未来のまちづくり講演会

日時：平成8年10月13日(日) 13:00～
場所：市民会館
内容：山鹿に古くから伝わる伝統、そして新しい取り組み。山鹿のまちづくりに必要なものはなにかを語り合う。
第一部 「わたしの国と日本」～外国人から見た山鹿の町
コーディネーター 小松一三
パネラー 鹿本郡内在住の外国人3人
第二部 「常田富士男のあったか話」
講師 常田富士男

まち並みウォッチングスタンプラリー

日時：平成8年10月13日(日) 10:00～
内容：豊前街道沿道でのスタンプラリー
（スタンプ会場 お祭り広場、天聴の酒蔵、蔓薔薇、八千代座・夢小蔵、灯籠民芸館、千代の園、木屋食品、薬師堂、市民会館）

PROGRAM

アートポリス参加作品パネル展・豊前街道シノラマ放映など

日時：平成8年10月12日(土)～18日(金) 10:00～17:00
場所：天聴の酒蔵
内容：アートポリス参加作品パネル展
豊前街道絵画展
豊前街道シノラマ放映
山鹿傘展

豊前街道まち並み写真展・骨董看板展・社寺仏閣パネル展

日時：平成8年10月12日(土)～18日(金) 10:00～17:00
場所：千代の園酒造、木屋食品

山鹿、鹿本地方の匠の技展

日時：平成8年10月12日(土)～18日(金)
場所：お祭り広場ほか
内容：灯籠制作実演
来民うちわ販売
竹製品の制作実演及び販売
酒づくりの工程紹介

豊前街道寺子屋塾

日時：平成8年10月18日(金) 14:00～16:00
場所：天聴の酒蔵
内容：豊前街道の歴史を学び、今後の山鹿のまちづくりについて考える。
講師：荒木栄司（郷土史家）

Kumamoto Artpolis'96

Yamaga

山鹿まちづくり展

オープニングイベント

OPENING EVENT

SCHEDULE

10月12日(土)～13日(日) 15：30～
場所／お祭り広場・山鹿市民会館・豊前街道沿道

12日(土)

15：30～屋台村（熊本うまかもん大集合）
16：20～バトンクラブパレード
（豊前街道～八千代座～お祭り広場）
17：00～オープニング式典、写真コンテスト・
景観賞表彰式
17：30～スッポン鍋の大盤振舞い
19：00～熊本移動芸術祭　熊本交響楽団コンサート
20：40～郷土芸能祭（山鹿太鼓・茶山唄おどり・
山鹿灯籠踊り）

13日(日)

12：00～スッポン鍋の大盤振舞い
11：00～17：00　屋台村（熊本うまかもん大集合）

もとアートポリス'96」実行委員会　■主管／「くまもとア　'96」山鹿まち　実行委員会・ふく　実行委員会

山鹿が沸いた、喜んだ！未来へ向かって祭りが、始まる

豊前街道を中心に、古いものと新しいものが調和したまちを目指す山鹿市。その活動の一環として10月12日～13日、豊前街道沿道を中心とした"山鹿まちづくり展"が開かれた。オープニングイベントは、12日15時30分から、お祭り広場をメイン会場に、約920名の参加で幕が開いた。

豊前街道に花が咲く、灯籠娘によるパレード

両日とも、時折り小雨がちらつくあいにくの天気。しかし、山鹿を思う人々の心は熱い。雨にも負けず、多くの市民、観光客が、豊前街道沿いのお祭り広場に集まった。イベントの始まりを飾ったのは、鶴屋バトンクラブと人力車に乗った灯籠娘のパレード。小雨が降りしきる中、千代の園酒造を出発。八千代座で折り返し、お祭り広場へと続く約1kmの豊前街道沿道を歩いた。

街道沿いの古いまちなみと人力車に乗った灯籠娘の姿は、まるで100年前にタイムスリップしたよう。沿道に並んだ市民や観光客が並び、「きれいねえ」の声が飛んでいた。パレードに参加した灯籠娘の1人、本山千香子さんは「いい記念になりました。灯籠おどり保存会に入って、八千代座などで踊ったり、こうやってパレードに参加したりと、山鹿をアピールする機会が増えました。今までとは違う視点で山鹿を見るようになり、まちを誇りと思うようになりました」と感想を語ってくれた。

住民がまちを考え、動く。まちづくりはここから始まった

パレードが到着したお祭り広場には、肉や天ぷら、焼きそばの店、市生活改善実行グループなどの屋台が大集合。食券を手に、子どもたちや観光客が祭りを楽しんだ。また、17時30分からは、山鹿の郷土料理スッポン鍋が振る舞われ、用意された800食分がすぐなくなるほどの大盛況だった。

また、お祭り広場の舞台では8人の鶴屋バトンクラブの踊りの後、式典を開会。山鹿まちづくり展実行委員会委員長の井上勝介氏により「豊前街道を中心とした、やさしいまちを作りましょう」と高らかに開会宣言が行われた。

続いて、くまもとアートポリス'96実行委員会副委員長の堀内清治氏による挨拶。「古さと新しさが調和した、ほかにない山鹿ならではのまちをつくりましょう」と、述べた。

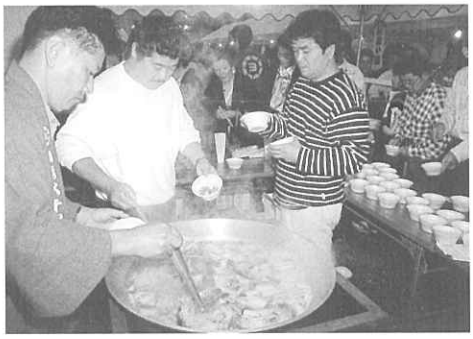
続く、鹿本郡社会福祉協議会会長であり鹿央町長の竹原清次氏は「まちづくりとは、住民の協力の上に成り立つもの。まちと住民の

心がバリアフリー化し、高齢者も住みやすい、社会福祉も考慮したまちづくりが大切である」と挨拶。中原淳山鹿市長は、市民の協力へのお礼を述べ、「このイベントが山鹿のまちづくりのエネルギーになってほしい」と続けた。この後は、豊前街道の写真コンテストと景観賞の表彰式が開催された。写真コンテストの応募は、山鹿市内外から75点。このうち、入賞作品は13点。最優秀賞に輝いたのは山鹿市在住の大木国重さんの作品「街道散策」だ。ほかに、山鹿中学校3年生の秋好美紀さんと野口幸代さんなど受賞者の顔ぶれは多彩。それぞれの豊前街道への思いをおさめた素敵な作品ばかりだった。

これら、写真コンテストの入賞作品は、期間中、千代の園酒造に展示されており、多くの見学者が、山鹿の一瞬、一瞬をとらえた素敵な写真を見ていた。

景観賞を受賞したのは、豊前街道のまちづくりに協力した16人。街道沿いの「山鹿灯籠の店なかしま」や「居酒屋とくしげ」「盛文社印刷」「中村薬局」「中村塗料」「おみやげ店若旦那」などだ。山鹿市では、平成二年に「まちなみ整備資金融資制度」を、七年には「豊前街道町並みづくり補助制度」を設けており、今後数年で50件の改修を行う予定だ。「山鹿には、全国から客を呼べる観光の拠点がない。でもこのイベントに参加して、この豊前街道が人を呼べる観光拠点になるのではないかと思った」という市民の声を聞いた。

豊前街道が、沿道に住む人の力を中心に変わってきた。市民が豊前街道を見つめ、知ることで市民の心が動き始めた。写真コンテストと景観賞の受賞は、その一歩を築いた人への表彰だったのだ。



コンサート、灯籠おどりに盛り上がった夜

19時からは、場所を山鹿市民会館に移動して、熊本交響楽団によるコンサートが行われた。約300名の観客で山鹿市民会館はいっぱい。モーツァルト作曲歌劇「後宮からの誘拐」序曲とシベリウス作曲「交響曲第2番二長調」の2曲が演奏され、曲の間には「あなたも指揮者」と題して「ラデツキーマーチ」の希望者3人の指揮による演奏も。同じ曲が、ゆったりした曲調になったり、勇ましい曲調になったりと大変化し、観客からは大喝采。客全員が手拍子をし、指揮者を支援し、大盛況だった。

コンサートの後は、またお祭り広場に場所を移し、郷土芸能祭で盛り上がった。あいにくの雨ではあったが、旅館の浴衣姿の観光客でテントは満杯。全国的にも有名な山鹿灯籠踊りを見ようと、たくさんの人が集まっていた。

まずは山鹿太鼓の演奏。山鹿太鼓保存会の11人による地面をうならすような勇壮な太鼓の音に「ブラボー！　太鼓っていいですね」の声が。「山鹿太鼓が聞こえたから何だろうかと思ってきました。いくつになっても祭りっていいものですよね」と近所のおばあちゃんは大はしゃぎ。観客には、甘酒もふるまわれ、続く鹿北町の25名の茶山唄保存会の「茶山唄おどり」ともども楽しんでいた。

そしてラストは、灯籠踊り保存会6人による「ヨヘホ節」「山鹿灯籠盆おどり」などの舞い。常田富士男さんの情緒たっぷりのナレーションに続いて登場した6人の灯籠娘の幻想的な美しさに「きれい」とためいきをもらしていた。

福岡から来たという女性は「通りがかりにこのイベントのことを知って覗いてみました。テレビで見た通りの優雅な踊りを見ることが出来て感動しました。甘酒も飲んだし、スッポンも食べました。後は温泉に入って帰ります」と山鹿旅行を満喫したよう。「広報やまが」を見てきたという山鹿市民は、熊本県内外から訪れた観光客の満足そうな姿に、「山鹿は温泉もあるし、いいところなのですよ」と自慢気に話していた。また「今年だけのイベントに終わらず、来年も"豊前街道まつり"をしたらどうですか」という声も。いきいきとした山鹿の姿に、山鹿市民も大いに喜んでいたようだ。

まちづくりシンポジウム

伝統と未来のまちづくり講演会

第1部

わたしの国と日本

コーディネーター
小松 一三

◆

パネラー
マリア ライアン・カイラ レイノルズ・カール ヘッセル

第2部

常田富士男のあったか話

まちづくりシンポジウム
伝統と未来のまちづくり講演会

第1部

わたしの国と日本

「浴衣と下駄で歩く人の傍らを
茶髪の若い人がバイクで走ってる
それがとても面白いです」

古い日本と新しい日本が見えるまち、山鹿

小松一三：このお仕事をお引受けする前に、実は今年の夏、私はスイスのベルンという所に旅に行って参りました。皆さんご存知だと思いますが、スイスはジュネーブが昔は首都だったんですけれども、今はベルンという町が首都になっております。このベルンっていうのは、ベアー、つまり熊のベアーから出た名前なんですね。向こうの読みをするとベルンになるんですけれども、熊が出た町、熊がいる町ということで、町の至る所に熊の飾り物、熊の彫刻その他がいっぱいあります。そして、もう一つ、まちづくりでびっくりしたのは、何百年前の家がそのまんま町の中心部に残っているんです。これはすごい。行く機会があったらぜひいらっしゃって見てください。昔のまんまの市電が走っていますし、昔のまんまの町並みが残っております。話を聞いてみると、実は、未来のまちづくり、って言うんですけれども、その景観を守るための費用が大変なんですね。それから、自分の家を勝手に造り替えることができません。今、日本は規制緩和といっていますが、規制緩和とは逆の規制が約２００００あるんです。窓の形もこれ以上広くしてはいけないとか、どっちの方向に窓を作ってはいけないとかね。いろんな規制がたくさんあって初めてその町が守られているという現状なんです。これはメキシコシティーの中心部も同じですけれども、そのかわり崩れたりした場合には、行政が負担をするから、という形ですね。

山鹿もちらっと伺っていると、そういう状況があるわけです。この町を守る、伝統を守るというのは大変な事だと思いますが、敢えて私も東京からこの熊本へやってきて、私も一つの外国人という立場でいろいろな見方をしております。自分たちでは気が付かないものでも、外からみると気が付かれる部分がいっぱいあるんじゃないでしょうか。そんなことを、もしこの御三人から学び取れれば、先も申し上げました通り、いいんじゃないかと思っております。外国と日本、私の国と日本という形で、見方が違うんじゃないかなという想定でお話を伺おうと思います。

マリア・ライアン：私は15カ月前に山鹿に来ました。1989年の夏にも1カ月間東京にいたことがあります。あまりにも多くの高い建物、あまりにも多くの人々がいました。私は水田や、丘や、森がある熊本県が好きです。私は熊本市へ自転車道を通って何度かサイクリングを楽しんだことがあります。それは30ｋｍ以上あり、往復5時間かかります。しかし、自転車に乗ることによって、周りの店や建物をよりたくさん目に留めることができます。

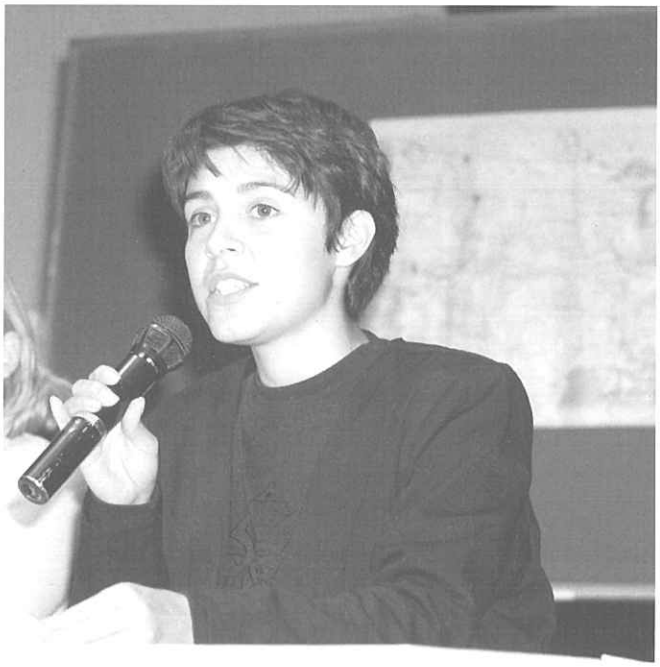
この山鹿には、あまりたくさんの建物はないし、道路や歩道は小さく狭いです。ほとんどは歩行者用の歩道がなく、自転車道もありません。もし、あなたが車でないならとっても危険です。私は、何度か車とぶつかりそうになりました。私は山鹿で親切な人々にたくさん会いました。しかし、車を運転する人々は、歩いている人や自転車に乗っている人に対して、あまり思いやりがありません。アメリカでは、歩行者や自転車がいつも優先。車は、普通彼らが先に通過するのを待ってます。しかし、ここではほとんどの場合、反対で危険です。車の運転者は、自分たちの方がもっと大切だと思っているようです。自転車に乗る人はたくさんいます。特に子どもが多いです。そして、この町には、あちこち回るバスがあるだけです。だから、歩行者や自転車のために改善した方がよいと思います。

私は自転車に乗るのが好きです。たくさんのよい点があります。そんなに早く走らないので、よく場所を見ることができます。排気ガスで空気を汚染しないので地球を守ることができます。バスや電車が来るのを待つ必要がないので、行きたい時いつでもどこへでも行くことができます。

山鹿には何年も前に建てられた建物がたくさんあります。新しい建物のパチンコパーラーの近くに、八千代座のような建物を見るのは面白いです。それは、古い日本と新しい日本を示してくれます。また、この町にはたくさんの温泉と旅館があります。夜に浴衣を着て下駄を履いて散歩している人々や、バイクに乗ったオレンジや赤い髪をした若い男の子達を見るのは面白いです。私は温泉も大好きです。実際、今夜も多分行くつもりです。

小松：マリアさんが自転車とおっしゃったところに、車というのを入れると同じことが言えますよね。私は車が好きです。ディーゼルカーじゃなくてガソリン車だったらそんなに汚染されたガスは出しません。バスを待つ必要もありません。ちょっと思い立ったらエンジンをかけたらすぐそこに行けます。という風な言い方になる。私達の生活はむしろ車というものが先にあるわけです。ついこの間、「何に一番車を使いますか」という自動車会社のアンケート調査の結果が新聞に載っていたのをご覧になったでしょうか。男性の一位が買い物です。その通りだなと思われますか？　不審に思ったんじゃないですか？　今、マリアさんがおっしゃった自転車が大好きというのと同じで、今、そこに見えているスーパーマーケットに車でタバコを買いに行きます。だから買い物なんですね。男性が車で買い物に行くというのは考えられなかったんですけれども、それ程車が私達の生活に密着しているということですね。

それは山鹿でも同じじゃないかなと思います。この辺にも、マリアさんがおっしゃった中に、反省しなければならないことがあるんじゃないかなとふと思った次第です。



八千代座は素晴らしい建物です でも、行き道が分かりづらいです

カイラ・レイノルズ：アメリカのフィラデルフィア市から参りました。今鹿北町に住んでいます。（地図を示し）マリアさんはアメリカのこの辺から来ました。私は東の方、ヘッセルさんは真中の方です。

アメリカの話でしたら、3人3様いろいろな考え方があると思います。今日はフィラデルフィアと山鹿のまちづくりの違うところを話そうと思います。やっぱり山鹿市とフィラデルフィア市の大きさは結構違います。ここはアメリカの最初の首都でした。アメリカで5番目の大きさです。山鹿の人口は3万人ですが、フィラデルフィアは150万人はいます。だから大きさも違います。そしてまちづくりには歴史が表れていると思います。山鹿の町は道路が狭いですね。フィラデルフィアはちょっとパリと似ていて、道路は広くて真っ直です。

八千代座は山鹿の誇りです。八千代座への行き方は曲がりくねっています。一方、古い市役所と美術館はフィラデルフィアの誇りです。そしてそのフィラデルフィア市の一番大きい道路はこういう風に真っ直ぐに走っています。この二つの建物は1マイルか2マイルくらい離れていますが、どちらも大事な建物です。八千代座はすごく素晴らしい建物とは思いますけど、私が最初に来た時、「八千代座の場所を教えていただけませんか?」と尋ねました。その点、フィラデルフィアは見やすいです。

小松：今、カイラ・レイノルズさんから、大事なことを言ってくださったと思いますけれども。レイノルズさんもおっしゃった通り、道路がくねくねしているのは仕方がないだろうと。もう一つ、八千代座は裏通りにあるから分かりにくいだろうと思います。町の文化遺産としては中心にあった方がいいんじゃないかと思います。ご自分が生まれ育ったフィラデルフィアは、新しいアメリカをつくるという形でスタートしました。そこが違うんですね。最初から、まちづくりの計画があったんですね。フランスから学んで、フィラデルフィアを新しくまちづくりをしようというものだったと思いますがね。

すでに豊前街道として出来上がっている八千代座のまちづくりというのは非常に難しいけれども、レイノルズさんもおっしゃった通り、町の中心にもってきたらどうでしょうか。八千代座を市庁舎の横にでも移転したらというのもあるでしょう。

それからもう一つ、ちょっと考えさせられたことがありました。向こうの町は、広いということです。あれだけ広い所ですから、移動するのには車がなければどうしようもありません。そこで、「レイノルズさん、貴方は車ばっかり利用していて町の中を歩かないんじゃないですか?」って質問したんですよ。「中心部から車で20分くらいの郊外に住んでますけれども、よく歩きますよ」って。皆さんは、果たして町の中を20分歩くでしょうか。これもレイノルズさんから学ぶべき問題じゃないかなと思います。

故郷のウィスコンシンは素晴らしい所。でも、山鹿に住もうと決めました

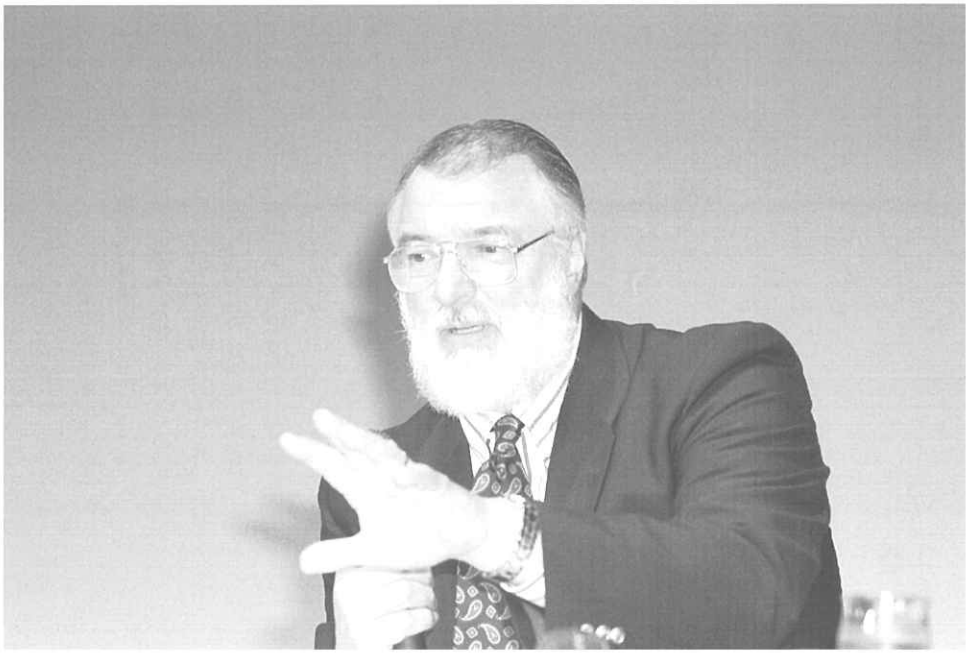
カール・ヘッセル：私はアメリカのウィスコンシン州で生まれ育ちました。私の先祖たちはドイツからウィスコンシンの方に来ました。ひいおじいさんたちですかね、彼らの代、１８５０年から１９００年ごろミルウォーキーという町に移民したんですね。彼らがウィスコンシンに来た目的は、ドイツの住んでいた場所と似ていたからです。水がいい、山林、土地がとてもいい、そして、牛、農作、酪農がちゃんと出来る所です。ウィスコンシン州はミシガン湖の隣、イリノイ州の上、ペンシルヴァニアよりちょっと北の方です。水が非常に多く、３分の１は森で、１万個の湖があります。すごく自然がいい所です。

小松：ミルウォーキーという。ビールも有名な所です（笑）。

カール：はい、そうです。私は札幌には行ったことはないので、ぜひ行きたいです。ところで、その３分の１は森があるところ。あとの３分の２はやっぱり酪農の盛んですから放牧地が非常に多いんです。ウィスコンシンはアメリカの酪農第１位の州ですからね。南の方には港があるので、海から入ることが出来ます。セントローレンスシーウェイから五大湖を通って、シカゴまで大きな海の水路があるのです。

ミルウォーキー市は、人口は60万人と思いますけど、そこで私は生まれて育ちました。アメリカの学生は三カ月夏休みがあります。私はよく夏中、北の方、森に行きました。そのころから非常に自然が好きになりました。熊がウィスコンシンにはいます。ブラックベアーズがとても多い場所です。若い時は熊をよく見ました。今もよく見ます。狼も来ます。そして鹿が多い所なんです。だから私は初めて山鹿に来た時、山鹿が山の鹿、鹿はどこですかと聞きました。ウィスコンシンではあまり山はありませんけど、鹿が多いです。熊より多い。とても自然が素晴らしい場所です。今もアメリカインディアンが６種族いて、非常に面白い場所です。

私は30年前に熊本に来ました。独身の時、九州学院に英語を教えに来ました。そこで３年間英語を教えて、その最後の年に、私の家内に会って、まだ家内じゃなかったけどね、結婚しました。その後アメリカ、ウィスコンシンの方に帰りました。そして９年前にまた日本に帰ってきました。家内が育ったのは熊本ですけれども、山鹿



マリア ライアン　カイラ レイノルズ　カール ヘッセル

に導かれました。何故山鹿に来たのかは、神様の導きだと思います。祈りによって来ました。30年来の友達と一緒に不動岩とその近くの蒲生の池に行きました。'86年11月15日の日でした。そこに立って、山鹿の方に住もうと決めました。今、私たちは三玉の方に住んでいますけれども、五郎丸という所は、住みやすくて美しいところです。どうぞ皆さん来てください。小さくて田舎の方です。私の国に似ている点はやっぱり水がいいところです。山鹿市は水がいいですよ。そして自然がいいですよ。とっても素晴らしい宝ですね。この周りには、鹿はいないですけれども山があります。そして農作物が豊かにあります。それもとっても大事です。山鹿市民もやっぱり農作物を守らなければならないです。農家の方、非常に町、市の大切な仕事です。それから山林も川もありますね。

ウィスコンシン州と違うところもあります。さっきは、お二人が話したことは車の交通、道のサイズ、広さ、歩道、そういうことを話されました。確かにアメリカのどこの場所も道は割と真っ直に作っています。特に新しい町は。もちろん日本は、特に山鹿の方には、山が多く、昔から家が建っています。本当は家が道より大事ですね。人間の住む所は車より大事ですね。だから真っ直な道がないわけです。だから出来るだけ国道3号線とか、325号線、57号線など、なるべくメイン道路を広くてきれいにしたらいいと思います。

そしてもう一つの違いは、ウィスコンシンにはスイカがないです。そして温泉もないです。山鹿は素晴らしい温泉があります。そして、ウィスコンシンにはおいしいモナカもない。そしてもちろん山鹿市のような歴史的な、文化的な遺産もない。しかし、シルバーという所、やはりドイツ人が移民した場所ですけれども、ひいおじいさんはこのシルバーという町のビール会社で働いたんですけれども、その家とその工場はまだシルバーに残っています。ビール会社は50年前にはつぶれたけれども、建物は残っています。そしてその隣でおじいさんが生まれた家はまだちゃんときれいにしてます。シルバーっていう町はまだ古い建物、歴史、まあ山鹿ほどではないけれども、150年前からずっと使って大切にしています。そういう歴史を大切にすることはとても大事だと思います。

以前、日本に来た時、倉敷に行きました。非常に気に入りました。立派な古い建物が残っています。八千代座のような古い建物を遺して、その周りも大切にするのはとても大事だと思いますよ。山鹿の市民達の歴史を貴方の子供たちが理解するのに、とても大切と思います。

山鹿は建物より人が好き

山鹿は素晴らしい場所だと思います。好きです。建物より人間が好き。このまちの3万4000人が好きです。まだ皆さんに会ってませんけど、ほんとに素晴らしいです。だから、道をなるべく真っ直出来るように出来なくても歩道が出来ればいいです。子供たちの自転車の事では非常に心配します。日本に初めて来た時、運転するのがとても不安でした。日本人は運転が上手だと思います。本当ですよ。私達は慣れなければならない。何年か掛りますけど、頑張ります。

それから、もう一つはアメリカの町にいったら、道路のカード、ポストがあってその道路の名前が書いてありますね。この道は緑、グリーンストリート、この道はファーストストリート、セカンドストリート、そういう風に書いてあるとすぐ場所を見つけることが出来ますよ。説明しやすいです。ひらがなでも漢字でもいいけど、ひらがなの方がいいと思います、メインストリートに名前があったらいいですね。小さな道はどうですか。探しやすいですよ。そして面白い。もちろん外人が来たらとても判り易いですよ。でも外人のためじゃないです。結局、私たちは山鹿に引っ越せて嬉しいです。本当に好きです。まだ9年目ですけど、皆さんよろしくお願いします。

小松：今、ヘッセルさんがおっしゃった通り、人間が好きです、本当にそうだと思います。やはり、いいなあと思ったのは、私も東京からこの熊本にやってきて、そういう意味では外国人ですから、そこに住んでおられる方と会うのが一番うれしいです。そして、山鹿ってこんなにいい所なんだよって。口では言わなくても、自信がある方というのは、それが何となく伝わって来るんですよね。八千代座があるとか、何かがあるとかということじゃなくて、もう生き生きとしているその姿を見るだけでうれしく思います。人間が好きというのはそういうことだと思います。それから今それぞれ、特にヘッセルさんは、自分の生まれた場所、ウィスコンシン州について語ってくださいましたけれども、ウィスコンシン州の良さが何となく伝わってきますよね。それはご自分が生まれて育った所への自慢の現れじゃないかなと思います。

まちづくりシンポジウム
伝統と未来のまちづくり講演会

第1部

わたしの国と日本

くねくね道をわざと作るって もしかしたら、新しいまちづくり？

今、マリアさんから出た問題としては、自転車道路がどうも不備じゃないかと。日本でもそろそろ、本来は歩く人と自転車が一番大事にされなければいけないんじゃないでしょうか。それから、今ヘッセルさんがおっしゃってた表示の問題。アメリカでは、通り名が書いてあってすぐ分かるんですよね。僕もここへ来た当初、3号線と言われても、うーんとどこかなって思ってました。

で、もう一つ、レイノルズさんから出た問題は、真っ直ぐの道がないということ。それからもう一つ面白い提案は、八千代座を町の真中に持ってきて、もう一度まちづくりをしたらいいんじゃないかという提案。果たしてそんなことが出来るのかどうだろかということもあります。

私どもが考えなければいけない部分は、レイノルズさんもおっしゃってましたが、アメリカは車社会でありながら20分間もいつも歩いていらっしゃるということですよね。私は東京人ですが東京っ子は実は歩きます。この熊本に来て一番びっくりしたのは、ちょっとすぐそこに行くのにすぐ「タクシーに乗ろうよ」と言いますね。日本人はもうそうなってしまったんじゃないかな。

でも、今度は私が中間的な立場で考えると、くねくね道があり、それを大事にするのが山鹿かも知れない。山鹿に来たらメイン道路は車で通れるけれど、あとは歩きなさい。さっき浴衣と下駄の問題が出ましたが、私が下駄を履いているからいうわけではありませんけれども、やっぱり下駄と浴衣と温泉というのは合うんですよね。下駄になって来るとコンクリートじゃうるさいんですよね。砂利道だといい音なんですよね。いっそ、砂利道にしたらいいんじゃないですか。

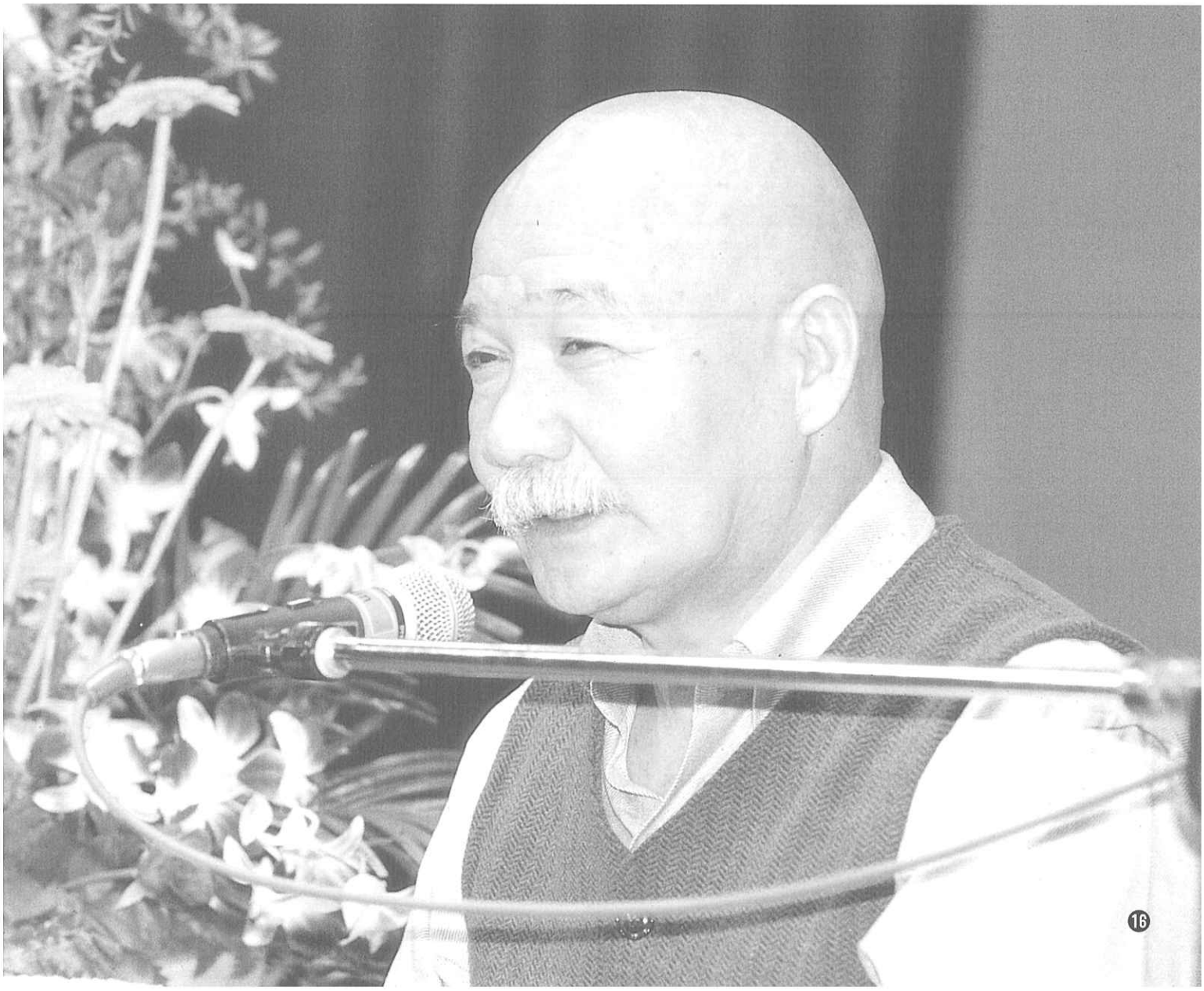
最近、道路の真中に、わざと車が通るとガックンとなるように、丸太みたいなものを置く道がでてきましたね。くねくねさせながらなおかつガン。するとスピードが出せないですよね。通るなというと人間ムッとするんですけれども、ガックンとくれば、チンチンは痛いし響くし…。それって、もしかしたら、伝統を守るというんじゃなくて、これは実際には（まちづくりが）先に進んでるんですよね。そういうようなこともいいんじゃないかなと。大きな道は真っ直ぐなんだけれども、小っちゃな道はむしろくねくねさせて、車が動けなくなる方が、もしかしたら山鹿を守れるんじゃないか。

考えるのは、私はもう遅いと思っております。考えるんじゃなくて実行していただかなければと思います。私も山鹿が大好きな一人です。私もこれからも山鹿に通ってきて、いろんな話をしようと思っております。どうぞ、みなさんも頑張っていただいて、自分たちの誇りを持てるような、「うちの町へ来なさい」と言えるような町になっていただければと思います。

〈第1部終了〉

まちづくりシンポジウム
伝統と未来のまちづくり講演会

第2部



常田富士男の あったか話

私は物語を二つ皆さんの前でやらせていただいて、その物語についてのお話をしながら、普段私が思っている事、おそらく皆さんもそうじゃないかなと思っている事を、物語を通しながらお話させていただいて、共通の話題、お互いに抱えている問題を感じるというか、知るというか、忘れていた事を思い出す、そういった作業を今日お互いの胸の中を回転してくれるといいなあと思っているんです。

自己紹介を兼ねまして、私が昔話風に、私の育った村の事、情景を物語風にまとめてありますので聞いてください。

昔話がテレビで始まったのが20年前、私が39歳の時でした。39歳の時に今私が住んでいる保谷市の市長選挙に立候補しました。公示の一日前に突然届け出たものですから、色々大変だったんですけれども、だから、こういうまちづくりというか、自分たちの住んでいる町のことについては関心が強いわけです。それはこれからお話する私の生い立ちにも随分影響するものだと思います。

じいさんが話してくれていたことです。河童は、田に水を入れたり、田植えの手伝いをしたり、田の草取りをしてくれたり、稲の刈り取りまで手伝ってくれるありがたいお方と言っておりました。春には山から降りてきて田の神様になる。秋にはまた山へ帰っていって山の神様になるんだと。河童も春のお彼岸に南の方から北へ、秋のお彼岸には北から南へ、ひょうーっ、ひょうーっといいながら移動する。村の者は、河童様のお通りだ、と、話し声を止めて、謹んでお見送りしたもんだと。私の育った山奥の小さな村の話ですが、今はちょっと寂しい村になってしまっております。熊本県阿蘇郡南小国村大字満願寺字田原という、今も37軒しかありません。昔とぜんぜん戸数も変わってません。じいさんは「こんな村でも、自分の生まれ育った村が一番いい。どこにも行きたくない」と話しておりました。まあ私は村を出てしまった人間ですが。そこは本当に静かないい所です。朝から晩まで光がいっぱいあって、緑がいっぱいで、気持ちいい風が吹き渡っていく。夜は深い闇に包まれて、心が本当に落ち着いて来るんです。その闇の中で、どこの家も、一日の疲れを癒して、お布団に入る。満月の夜が近づくと、村の者達は、そろそろ竜神様の嫁入りが見られるぞ、と話し合っていました。山の上にまんまるいお月様が上がりました。沢から集まった水は、上の方からゆるやかにくねって流れて、月の光で水の流れは急にきらきらと輝き始めるんです。その輝きは暗い谷間を昇る竜の鱗のように見えるんです。白無垢で着飾った竜の花嫁さんの姿、この高い稲荷山から見下ろすと、その村の真中を流れ

る川は、きらきらとうねりながら夜空に昇って行く竜の姿に見えるんです。水の流れの音に励まされるように静かに静かに、それもうれしそうに昇っていく。高ーい山の奥には、年取った河童さんが住んでいて、毎年その満月の夜の情景を楽しみにしているんだと話していました。

昔から村の人たちは川を大事にして暮らしてきました。筑後川の上流なんですけどね、川から脅かされ、泣かされたことは幾度もありましたけれども、いたずらに堰き止めたり汚したりはしませんでした。そんな機会もなかったんですね。魚や沢ガニを取る時も心の中でお礼をいって入ったよ、と。自分達の周りの全部の自然に感謝する心、それから畏ろしいとか、驚く心を忘れない人たちばかりでした。これがですね、私の村の山と山の谷間に37軒ぽつぽつとあるとある村の情景なんです。これが私の幼い時の暮らした村でしてね。小さな温泉も湧いてるんです。共同風呂がありまして、その共同風呂は村中の人ばかりでなくて、1kmとか2kmとか離れている隣村の人達も、下の小国町という町の方から買い物を終えてバスで降りると、夕方近くその風呂に入って家に帰っていくとか、早上りといいまして、田植えの終わった時のお祭りごとに風呂に入ってきたり。共同風呂というのは本当に活気付いておりましたけれども、自分の家に風呂を引くようになったりして、便利にはなったんですが、私は車からおりたら直接家に入ってしまうとかね、仕事場から、仕事も共同作業がずっと牛相手だったものですから、みんなで力を合わせて、回りばんこに田植えをし、刈り入れも回り回って順番が決められています。時代の進み方ですからこれは何とも言えないんですけれども、そういった人と人が集まって出会う場所というのが本当に日常的にたくさんありました。

川では朝早くじいさんかばあさんが孫連れたりして川洗いに下りてきて、東の方を向いて、じいさんが頭を下げていると、孫もちょこっと頭を下げているとか。川の両岸にそういったものが点々と見えて、アヒルが鳴いたり、ニワトリの声がしたり、子ども達の声、じいさん、元気のいいばあさんの声が飛び交ってきたりですね、その谷間全体が牛の声、いろんな声が混ざって、なんか生きてるものに囲まれてる私、って感じがあったんですけれども。今そういったものが車社会になって、いろいろ機械化されて、便利になった代わりに、心の繋がりが非常に寂しくなってしまっている。まあ大人はともかく一生懸命やってきたわけですから、今のこのあり方というのは幾分喜ぶべき所もたくさんあるでしょうけれども、子どもたちにはちょっと寂しすぎる環境じゃないかなと、思ったりしてるんです。

こういう村で育ったものですから、昔話の中でいろいろ色々神様が出てきたり、ひょうきん者が出てきたり、いろんな動物と交信、話し合う、足を踏み入れてはならないという場所をお互いに守って大事にして、一つの生活のあり方を大きく形作っていたものが壊れてしまったという事が、昔話やっていながら感じる事でね。まあこういった私の生まれ在所の姿、これは家の村だけの問題ではなくて、日本中全体の事じゃないかなと思います。

5年前の出来事でした。長崎県の諫早市の催しで、日本の子供ふるさと大賞という、全国から童話だとか、民話、現代民話、そういったものとか募集しまして、その応募作品の中から大賞作品を決めてそれで大賞に選ばれた作品をこれからご披露します。私も審査員の一人として、参加していました。これは、3世代一緒に暮らしている家庭の幼い子供にとって、小学1年生のえっちゃんという人が、女の子が主人公で出て来るんですけれども、その子供のあり方を、お母さんが綴ったものなんです。創作講演童話、森谷みかさん、この人は横浜の方に住んでいらっしゃる40近い主婦の方です。

おじいちゃんの聴診器

町医者の家庭の話しです。「はい、新藤でございます。はい、はい、それでお熱は何度くらいあるのですか？」。えっちゃんは夢の中で犬がわんわん吠えているような気がして、急いでポンタの所に行こうとして目が覚めた。あの声は、電話のベルの音であったのだろうか？　「はい、昨日の夜までは何ともなかったのですね。熱は？急に出てきたのですね」。おばあちゃんの声が聞こえる。「分かりました、ちょっとお待ちください」。えっちゃんの部屋の前の廊下をスリッパがぱたぱたと走っていった。

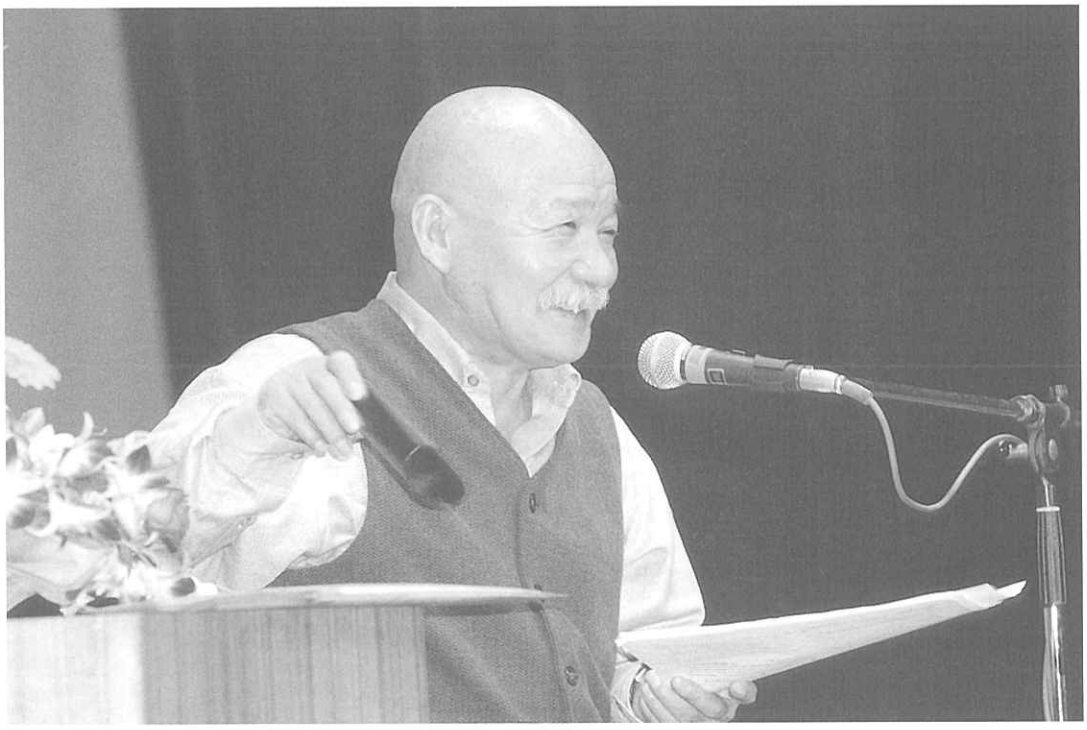
おじいちゃんの部屋から何かコソコソと話し声が聞こえる。えっちゃんはすっかり覚めてしまった目をこすって時計を見ると、夜中の3時であった。またかあ。えっちゃんは昨日に続いて今日も夜中に起こされたことに腹が立った。ぱたぱたとスリッパが走っていく。「もしもし、お待たせいたしました。ではこれからすぐ伺うそうです。郵便局の所を右に入って2軒目ですね。はい。はい。では、お大事に」。おばあちゃんがいつもの調子で答えていた。3月といってもま

まちづくりシンポジウム
伝統と未来のまちづくり講演会

第2部

常田富士男のあったか話

だ寒い。春になったかと喜んだかと思うと、まるで冬に逆戻りしたかのような寒い日が来る。部屋の温度計は8度であった。寒いなー。えっちゃんは、ベッドから半分落ちかけてしまった毛布をたぐり寄せると大きなあくびを一つした。その朝、寒い分だけ空は真っ青に晴れ渡った。「えっちゃーん、おはよーう」。ヒロシ君の声がする。お母さんが答えた。「あらヒロシ君、ごめんね。エツコね、今日寝坊しちゃってこれから支度なの。悪いけど先に行っててくれる。寄ってくれてありがとう」。「はーい、じゃ先に行ってきまーす」。「お母さん起こしてくれないんだもの」。「お母さんだって朝食の用意があるからもう少し寝かせておいてあげようと思ったのよ」。「エツコ、もうすぐ2年生になるのだから自分でちゃんと起きなくてはいけないよ」。おじいちゃんに叱られた。「だっておじいちゃん、夜中にまた往診だったでしょう。エツコそれで起きちゃったんだから」。「ごめんごめん、でもエツコ、小さい赤ちゃんが熱を出したのだ。誰だって診察に来てほしいと思うだろう」。「でも」。えっちゃんはその赤ちゃんにずっとやきもちを焼いていた。えっちゃんが家を出ようとした時に、門の所に若い女の人が立っていた。「先生いらっしゃいますか」。「はい、おじいちゃん、お客様よー」。「いいえ、あの、夜中に往診していただいた山中です」。「ああ、患者さんなら病院の入り口の方へ回ってください」。「いいえ、あの、診ていただいたお陰で今朝子どもの熱が下がりました。どこに電話しても断られ、診ていただけず、初めてお願いした先生に往診していただき本当に助かりました。今朝、庭に水仙が咲いていたのでお礼にと思って」。若いお母さんが差し出した水仙は、黄色のラッパ水仙で、それはちょうどえっちゃんが学校へ来ていく黄色い服と同じ色であった。えっちゃんはおじいちゃんが大好きである。一日の診察が終わるとおじいちゃんはいつもえっちゃんをあぐらをかいた足の上に乗っけて夕食を食べた。小さい時からずっとである。でもこの頃はそうして抱っこされるのが少し恥ずかしくなってきた。「ねえ、おじいちゃん。えつこもう一人でお座りして食べたいの。だってもうすぐ2年生になるんだもの」。「そうだね。もう2年生だね」。うれしそうな、ちょっと寂しそうなおじいちゃんの返事であった。えっちゃんのお父さんは大学病院の外科のお医者さんだが今学会で九州まで行っている。だからお父さんよりおじいちゃんといる時間の方がずっと長かった。いつも夕食の時は、えっちゃんはその日の出来事を身振り手振りでおじいちゃんたちに話して聞かせる。「今日学校で、エツコね、旅人の役をやったの。『この道はシーアンまで行きますか』というの。シーアンてどこにあるか知っている？おじいちゃん」。「中国だろ。今おじいちゃんは3000年も前にそこで作られた薬を使って病気の人を治しているのだよ」。「3000年前っておじいちゃんが生まれたもっと前なの？」。「ふふ、もっともっと昔だよ。漢方薬っていうんだよ」。「漢方薬？」。「えっちゃんがこの前かぜを引いた時に



飲んだ薬さ」。「あー、あのおいしくない薬ね」。「良薬口に苦しってね。よく効く薬はあまりおいしくなんかないのだよ」。その時、病院の玄関のベルがなった。おばあちゃんはすぐ走っていき、またスリッパをパタパタさせて戻ってきた。「おじいさん、お腹が痛いといって来ている人がいるのですけれど」。「ようし、すぐ診よう」。おじいちゃんはまだ口の中に入っている酢豚のピーマンを慌てて噛み、お茶を一口すすり、ぶくぶくっとうがいをしてゴクンと飲み込んでしまった。痛がっている人を待たせるわけにはいかない。これがおじいちゃんの口癖であった。でも、痛がっている人を待たせて自分が食事をしても、ちっともおいしくないというのがおじいちゃんの本音であったかも知れない。それでも何でも、おじいちゃんは自分が何をしていても、すぐ患者さんの所へ飛んでいった。お風呂に入ってすぐ出たために、くしゃみを3回したこともある。トイレの中から、今すぐ行くからと怒鳴っていた事もある。飲み込んだサンマの骨が、しばらくの間、咽喉の奥にひっかかっていた事もあった。そんなにまでして急がなくてもいいのに、と、えっちゃんはいつもそう思っていた。えっちゃんは時々、診察室の隣のおじいちゃんの休憩室に入るのが大好きである。大きな白衣、聴診器、血圧計、注射器、ピーカー、薬、脱脂綿、釣りの道具、そしてクレゾールの匂い。その中で一番興味があったのは、白い鹿の角でできた聴診器であった。触ってはいけないといわれていたが、ある日、おじいちゃんが医師会の集まりで出掛けた時それをそっと借りて自分の部屋に入った。患者さんが3人待っていた。鼻の黒くなった白熊のぬいぐるみのサリー、足が片方取れてしまったフランス人形のミカ、そしてビーグル犬のポンタであった。「次の方どうぞ。お名前は、サリーちゃんですか。ちょっと胸を見てみましょう」。えっちゃんは白い診察器を使って上手に診察を始めた。「えーと、これは風邪ですね。お薬を3日分出しますから薬局の方へ、お回りください。えっへん」。おじいちゃんの咳払いまで真似している。次のフランス人形は食べ過ぎであった。そして3番目のポンタは、仰向けに寝かされ、お腹を聴診器で探られ挙げ句の果ては肺炎で入院となった。それでもポンタは嬉しそうにしっぽを振っていた。しっぽを振ったついでに、遊んでもらえるのかと思って、近くにあった白い骨のような塊をくわえた。「ポンタ、ダメダメ、それおじいちゃんの」。こう言った途端ポンタはそれをくわえて走りだした。「それだめ、おじいちゃんの大事な聴診器なんだから」。えっちゃんは慌てた。しかしポンタは得意げにそれをくわえて自分の小屋まで運ぶとゴムをくわえて思いっきり振り回した。「えっちゃん、おじいさんが呼んでますよ」。おばあちゃんが心配そうに呼びに来た。「えっちゃん、何したの?」。「ううん、何も」。おじいちゃんの部屋がとても広く見えた。「エツコ、エツコ。この聴診器を壊したのはお前か」。いつも優しいおじいちゃんの声が、今日はとても低く響いた。「私じゃないの。ポンタが…」。「ポンタがこの部屋に入ってこれをくわえたというのか!お前は責任を全部ポンタのせいにするのか!」。おじいちゃんのこめかみに青い筋が浮いている。

「エツコ、これは、おじいちゃんのお父さんが使っていた古い聴診器なのだよ。このおじいちゃんだって子どもの頃、いつも触ってみたいと思っていた。いやあ、時々使っては、知らない振りをしてまた元に戻しておいたものだ。使ってみたい気持ちはよく分かるが、なぜこんなに壊してしまった責任を犬のせいにするのだ。なぜ、ごめんなさいの一言が言えないのだ!」。おじいちゃんの声が震えていた。「だってポンタがくわえて行っちゃったんだもの。エツコのせいじゃないよ」。えっちゃんの顔を、おじいちゃんは悲しそうな顔をして見守っていた。おじいちゃんがトイレで倒れたのはその夜であった。夜中の救急車のサイレン。おばあちゃんの慌てぶり。お母さんは、電話にしがみついてお父さんに叫んでいた。「あなた、おじいさんが倒れたの。すぐ帰って来て下さい」。えっちゃんは、救急車に担架で運ばれるおじいちゃんを見ながら、あのおじいちゃんの悲しそうな目を思い出し、自分のやった事が大変な事を引き起こしてしまった気がして震えていた。3日間おじいちゃんは意識がなかった。4日目、家族が呼ばれ、えっちゃんが側に行くと、おじいちゃんは少し目を開け、ほとんど意識のない状態で、それでもえっちゃんの肩を抱いた。今謝らなくちゃおじいちゃんが死んでしまう。えっちゃんは自分でもびっくりするくらいの大きな声で叫んだ。「おじいちゃん、ごめんなさい。あの聴診器、私が使ったの。サリーちゃんを診て、ミカちゃん、そしてポンタを診てたら、そしたらポンタが急にくわえて逃げたの。骨かと思ったの。追いかけたんだけど、どうしようもなかったの。ごめんなさい。おじいちゃん、私が悪かったの、ごめんなさい」。叫んでいるうちに、涙がいっぱい出てきた。「だからおじいちゃん、死なないで。死なないで」。涙が布団を濡らした。おじいちゃんのこんな大きな手も濡らした。すると、おじいちゃんの目からすうっと涙がこぼれた。それが、最後の涙であった。おじいちゃんのお葬式にはたくさんの人が来た。親戚の人ばかりでなく、患者さんが多かった。「私より先生の方が先に逝くなんて」と、泣いていたおばさん。「お金がない時、先生は、今日は私のおごりだと言って、無料で診て下さいました」と、言っていた

おじいさん。「夜中でもすぐ飛んで来てくださった。もうそんな先生はいない」と、がっかりしていたおじさん。「いつもにこにこしていらして、それだけで安心でした」と、懐かしむおばさん。悲しければ悲しいほどえっちゃんは後悔した。初めから謝っておけば、こんなことにはならなかったと、えっちゃんは、お父さんの胸の中で泣いた。「お父さん、私がおじいちゃんを殺さなければおじいちゃんは死なないですんだのに」。お父さんは、えっちゃんの髪を撫でながら、静かに言った。「これは、えっちゃんのせいではないよ。おじいちゃんは患者さんを助けるために自分が無理をしてしまったのだよ。食事の時の診察も、夜中の往診も、皆患者さんが苦しんでいるのを助けたいと思うおじいちゃんの優しさ。自分の歳や体のことを考えたらもう少し楽をしてもよかったのだろうけれど、でも見てご覧、えっちゃん。これだけたくさんの人達がおじいちゃんの死を悲しんでお別れに来て下さっている。人間としてこんなに幸せなことはないと思うよ。こんなに人に惜しまれて死んでいったなんて、とても幸せだったと思うよ」。

えっちゃんは涙を拭いておじいちゃんの写真を見た。おじいちゃんはにこにこと笑っていた。「ごめんね、おじいちゃん。エツコもおじいちゃんみたいに人を大切にする大人になるよ。お医者さんにはならないかも知れないけれど、困っている人がいたら助けてあげられるような、優しい大人になるよう、謝らなかったこと許してね。おじいちゃん、この壊れた聴診器、私に下さい。エツコの一番の宝物にしておきたいの。だって、これがあると、おじいちゃんはいつも側に居てくれるみたいだから」。外はおじいちゃんの涙のような暖かい春の雨であった。

●●●

これがおじいちゃんの聴診器という森谷みかさんの作品でした。この作品をなぜ読ませていただいたかというとですね、自分たちの住んでいる場所を、どういう風に考えたらいいのか、知っているけど忘れていることがあると思うんです。結局中心というか、ヘソみたいなものを忘れちゃってる。人間、私にとって大事なことってどういうことなのかということを忘れちゃってる。人間は弱いものだ。自分だけではどうしようもならないものなんだということを忘れてしまっている。経済に翻弄されちゃってる部分があると思うんですが、それだけではどうも暮らせないんじゃないかと思うんです。

この「おじいちゃんの聴診器」が、なぜ大賞作品に決まったかというと、3世代という、核家族だとか随分長い間言われてます。仕事の仕方や交通機関など、いろいろ変わってきてますのでね。そんな現実はあるわけです。しかし、じいちゃん、ばあちゃん、高齢化とかいろいろ言ってますけれども、自分の身近にいる子どもたち、孫、そういったものに繋がりを感じなくなっちゃった。感じてはいるんだけど伝えられなくなっちゃってる。こういうことで、幼い子どもたちも非常に不幸せな時間を送っているわけですよ。結局目先のことだけ。何か潤いが持てない。みんなの中に私がいるっていう感覚がどうしても持てない。おじいちゃんおばあちゃん、3世代一緒に暮らさないまでも、貴方にはそういう人がいます。あの子の家にもそういう人がいるのよ、といった膨らみを子どもたちに伝えてやることで子どもは潤いのある精神状態を持てるんじゃないかと思うわけです。子どもたちのために3世代が必要だということを、親はしっかり考え直してみる必要があるんじゃないかと、森谷さんは思ってるんでしょうね。それが一つ。それからえっちゃんが死に際おじいちゃんを看取った、お別れを言えたえっちゃん。僕も随分今まで大事な人と別れてきて、枕元でお別れをいったのが何人かいます。これは僕にとってはものすごく貴重な出来事です。生まれて来る、死んでいくということに対して、おじいちゃんと私という関係も薄れたように、間にいろんな出来事がばらばら入り込んじゃってるだから繋がりが持てなくなっている。それは大人の責任だろうな、と私は自分で言い聞かせてるんです。

それで、看取った、はっきりおじいちゃんの手を濡らすことができた。自分の目でそれを見たという、その体験は大事だと僕は思うし、森谷さんもそう思ってるんでしょう。生まれてきてオギャーという瞬間が、医学に助けられてる所もあるし、非常にサバサバと切られてしまっている部分もあるわけです。どうすることも出来ない現実もある。そのどうしようもなさを知った上でものを見たり接したりするのは大事じゃないかと思うのです。えっちゃんはおじいちゃんにしっかりお別れを言えた。これは恋愛をして子どもを産んだり、いろんなものと出会った時、この体験はおそらく大きくその人を作り上げていく土台になっているんじゃないかと思います。そういう、産まれて来るもの、死んでいくものに対して、きちっと立ち止まる事の出来る人、というものを大事にしたいという。

それと、目移りする世の中ですけれども、自分に一番大事なものを探し得たということ。幼い時にみんな持ってるんです。そんなものと笑われても、その子にとってはもうとっても秘密っぽくて大変いいものなのです。そういった宝物をうーんと記憶させる。そうしたら人の大事なものもよく分かるようになる。自分がどんどん目移りしてると、人のものもそれほど大事に見えなくなったりする。宝物探しが出来たえっちゃんは、ものに対して人に対しても一面的に

物を見てしまうタイプの育ち方じゃなくて、いろいろと楽しむことが出来る女の子に成長していくんじゃないかと思います。

この3点が大賞作品になった理由でした。福井の小学校の体育館に集まってこれを読んだ時に、後の方にいた小学5年生くらいの男の子に「君の宝物は何か、教えてくれないか」と言ったら、はにかんでおりましたが、「私の妹です」と言ったのです。そしたら前の方にいた女の子が「私でーす」と。体育館全体で子どもたちがものすごい反応して、我がことのように喜んだりはしゃいだりしてるんです。「私にもいまーす」という女の子も言い出したりして。そういう宝物を持つっていいですねえ。

まちづくりというのは、家庭や日本の政治もそうですけれども、へそになるような人がいないとだめなんですね。そしてそういう人は、お金の使い方が上手だったり、我慢することが上手だったり、泣いたりわめいたりがしっかりできる人、そういう人がへそになってくれないと、物事は丸くまわらないのです。どこか中心に持たないと、まちづくりは、“やばい”んじゃないかと思うわけです。

山鹿の場合だったら、山鹿大家族という意識を山鹿の3万の人達がしっかり持たないと、子どもたちがちょっとかわいそうだな。僕の田舎では、おじいさんからすごく怒られたり、妙に頭を撫でてもらったりした記憶があるんです。自分のおじいさんじゃなくてですよ。昔はそういう人がいた。懐かしら何かぽっと出して食わせてくれたばあさんがいたりとか。人の台所の様子まで知ってるというか…。そういうことをみんなお金のために忘れちゃったんですよ。人間って本当はとても不自由だということを忘れて、何でも出来るって思っちゃった。だから本当にくつろぐことも、本当に泣くことも出来ない。さっきの踊りだって、あれは本当に地獄を見ることが出来た人、生活の苦しさを知っている人、我慢が出来た人、そしてそこから這い出たいといった魂がエネルギーとなってああいう踊りになっているんです。祭って、何か厳しさとか、共同体のいろんな問題が渦巻いて出てきた所にできていると僕は思うんです。

市長選挙に私が出た時も、何を我慢しなきゃならないか、そのことを大事にしよう。暮らしの中でそのことを大事に考えよう。お金の使い方は上手になろうと言ったんです。僕はお金の使い方は上手なつもりで切り盛りしてるし、相手とも渡り合っているつもりです。演劇集団を作っていることもやっぱり一つの大きな切り盛りですものね。ただある時は使わなきゃいけない、ある時は我慢しなきゃいけないという部分がある。それでお互いに同じ所で息しているわけですからね。自分がオギャーと産まれた時はみんな、おしめを代えてもらって、世話になって大きくなってるわけですからね。

そういった、次から次へどうしようもなく続けなければならない人間の生き様みたいなものを、大事に考えなくちゃいけない。今頃地方の時代だとか言ってますが、僕が39歳の時はもう、それを言ってたんですけどね。いろいろ具体化されると、いろんなものが行き詰まってきてますからね。分かりづらいようで分かりやすくなっている。お金の使い方は分かり易くなっている。変なことをするとすぐ分かっちゃう。自治体が大きくなると、お金がどこにどう使われたのか分からなくなる。平等に地方にお金がまわっていくとしたら、当然、山鹿にもお金が分配されなくてはいけないのです。

そうしたら独特な山鹿大家族が、独特な環境を作り出す。温泉があるとか、山に囲まれているとか、川がどうとか、残すべきこと、変わっていくべきこと、宝探しをえっちゃんみたいにしっかり町じゅうで早くして、何が変わっていくべきかを考えなければならない。自分のうちの宝物を忘れちゃってるというところもありますからね。自分の家庭の中ではどんな宝があるか、そういったことを町全体でしっかりイメージし合えるよう。宝探しイベントをやったらいいんじゃないかな。

インターナショナルというか、今日も外国人でこちらに来ている方が山鹿について、いろいろ発言してましたけれども、「やっぱり面白いなあ。具体的だなあ」と思うことはたくさんありますね。山鹿のことをたくさん知っている子どもを育ててあげてほしいですね。誰かと会った時、東京や外国に行った時、自分の町のこと、風土から家族関係の興味深い所まで全部感じ取れる子どもを、外国の子どもたちはものすごく注目するんですよ。何も英語を喋れなければ国際人じゃないという話じゃなくてね。もちろん喋れるに越したことはないんですけどね。自分の国、育った所について、いろんな面白いことを相手に伝えられる人は興味深く迎えられると思います。お互いにそういった興味を通して知り合うという出会いを楽しませてくれるんじゃないかと思うんです。みんな分かっているようでなかなか難しい。心がけるというのは大事だと思っています。

最後に一つ、これから童話を一つやります。僕の友達で劇作家の別役実という人がいるんですけれども、その人が三一書房から「星の町の物語」という童話集やエッセイとかを出してます。芝居の本を僕に書いてくれている大変忙しい人なんですけれども、その「星の町の物語」の後書きに、こんなことが書いてあります。ああ、山鹿の町も星の町だと。面白い話題だなと思って書いてきました。

星の町っていうのは、山鹿の町といってもいい。そこの町の文化は、知恵といってもいい。そこの町には4つの知恵の段階が見える。

その一つは、近いものを見る目。2は遠いものを見る目。3は果てを見る目。4は果てから帰ってくる目。近いものを見る目というのは知恵の一番低い段階で、果てから帰ってくる目というのが知恵の一番高い段階であると。まず人は自分の一番身近にあるもの、それも目的のかなったものしか見ません。目の前にある食べ物を見て、それを手に取ったり、奪われそうになると追い掛けていって取り返したりする。自分に関係のないものには一切目を向けません。それが知恵の第1段階で、近くを見る目。

次に、2は、次第に遠くのものを見ようとするようになる。自分に関係のないものを見ようとする。これは好奇心の始まり。丘の上に上ったり木に登ったり、なるべく遠くを見ようとする。どんなに遠くまで目をやったとしても、その目は実際に見えるものしか見る事が出来ない。これが知恵の第2段階。

第3が、目の届くものは全て見てしまって、その先にあるものを見たいと考えるようになる。つまり見えないものに関心を持ち始める。この段階に入った人は大抵丘の上に登って遠くの方をぼんやりと眺めている事が多くなります。しかし特別に何かを見ている訳ではありません。いってみれば、見えるものを越えた、遥か果てを見ようとしている。希望とか願望、絶望も含めてそういったものをみようとする。

第4には再び近くのものを見るために帰って来る目。それは第1段階の時のように直接それに向けられている目ではなく、その視線は一度遥か果てまでいって反射して来る視線なのです。自分を見る目、自分のいる所を俯瞰で遠くから見ることの出来る目。それが知恵の完成の時である。

4つの目をこの星の町の人達は楽しんでいる。僕達もよく考えて見ると、無意識のうちにこういった4つの目を、時には色々な風に感じながら、暮らしていると思います。

それからこの人の星の町の物語から、「馬から聞いた話」を聞いて下さい。あるものが見えなくて、ないものが見えて来るような、ちょっと奇妙といえば奇妙な話です。

馬から聞いた話
ー何もない猫

耳が一つしかない猫がおりました。そのかわりその猫には、目が3つついておりましたから、誰にも笑われずにすみました。目が一つしかない猫もおりました。そのかわりその猫にはしっぽが2本付いておりました。鼻の穴が1つで口が2つある猫もおりましたし、おへそがなくて足が5本ある猫もおりました。そうしてそこに、何もない猫もおりました。何もない猫には、目も耳も鼻も口も頭も胴体も足もしっぽも何もない上に、そのかわりも何もなかったので、誰もそこにそんな猫がいるなんて知りませんでした。その何もない猫を産んだお母さん猫も、産んだと思ったところが、何もないので、産まなかったのだと思って忘れてしまいました。「産まなかったのかい」。「だって、何もないんですもの」。そういって、何もない猫を産んだお母さん猫は、お魚の骨を探しにいってしまったのです。ですから何もない猫はいつも一人ぼっちでした。時々屋根の上から青い空と白い雲を見上げて、ほうっと溜息をつきます。「ああ、せめてヒゲだけでもあったらにゃあ」。「おい。今、屋根の上から溜息が聞こえて来なかったかい」。しっぽのないかわりに耳が3つある猫が言いました。「なあに春風だよ。春風が今屋根の上から下りてきたんだよ」。足が3本しかない代わりに口が2つある猫が、その2つの口を替わりばんこに動かしながら言いました。しかし、しばらく経つと、どうもこの町には何もない猫がいるらしいという噂が広がり、とうとうある日、隣町の博物館の館長さんが大きな捕虫網を持ってやってきました。「みなさん、こんにちは。この町には何もない猫がいると聞いてやってきました」。「噂ですよ、誰も見た者がいないのです」。「よろしい、私が捕まえてあげます」。そういって、博物館の館長さんは何

まちづくりシンポジウム
伝統と未来のまちづくり講演会

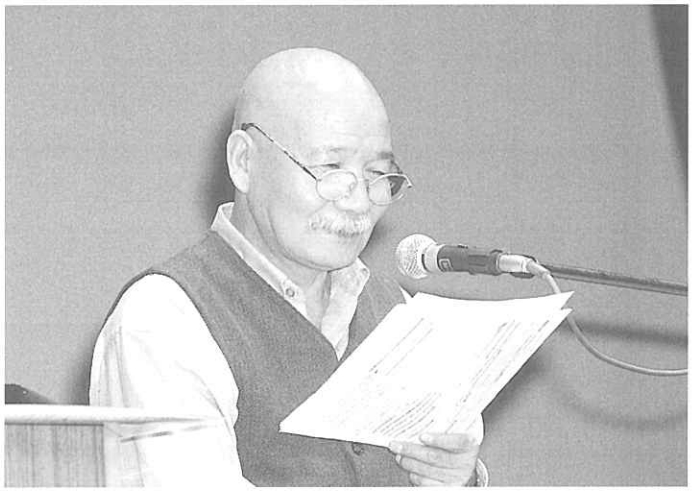
第2部

常田富士男のあったか話

もない猫がいそうな所を狙って大きな捕虫網をぶるるんと振るいました。もちろんそこには何もない猫も何もいなかったので、勢い余った館長さんがドシンと尻もちを付いただけでした。その日博物館の館長さんは町中で36回も捕虫網を振るい、花壇の花を目茶目茶にしたり、教会のガラス窓を壊したり、馬のお尻をひっぱたいたりして、日が暮れるころ、ようやく諦めて帰っていきました。「ヘタクソ」。町はずれまで館長さんを見送った何もない猫はそう呟きました。実はその日何もない猫は、館長さんに捕まえてもらおうと思って幾度も近づいたのですが、その度に館長さんはやり損ねてしまったのです。再び何もない猫は、町の人達からも忘れられて一人ぼっちになってしまいました。夜の屋根の上から、三日月様を見ながら、涙をこぼすと、涙だけが一粒軌跡のようにこぼれ落ちて、屋根の上に小さなしみを作ります。もちろんそれもまたすぐに、誰にも見られないうちに乾いて消えてしまうのです。「あーあ、いつになったら町の人達は私がいる事に気付いてくれるのだろう。かわいがってくれたり、ほめてくれたりしてくれなくてもいい、せめていることに気付いてくれればいいのになあ」。そのうち、何もない猫も年を取りました。年を取った猫は、自分でお墓を作らなければいけません。何もない猫も、町はずれの丘の上に自分のための小さなお墓を作りました。そして、いよいよ最後の夜、何もない猫は、いつものように屋根の上に上がりました。最後に、お月様を見て、それから死にたかったのです。しかしその夜は雲が低くたれ込めて、なかなかお月様は顔を見せてくれません。猫は待ちました。苦しいのを一生懸命我慢して待ちました。とうとう夜明け近く、雨までぽつぽつ降り始めて、猫もあきらめました。「ねえ、これは何かしら」。翌朝、目を覚ました女の子が花壇を指差して大声をあげました。花壇の真ん中に、ちょうど猫の形に雨で濡れていない所があったのです。「何もない猫だよ。何もない猫が昨夜ここで死んだんだよ」。町の人たちは、そこに何もない猫のための小さなお墓を作ってあげました。

童話や昔話とかに向かい合うというような時間を大事にするために、大人は自分の懐かしい子どもの頃の思い、それから忘れてしまっていること、思い出してみたいことを大事にしながら周りの子どもと付き合ってもらいたいですね。教えることばかり考える大人よりも、聞き上手、一緒になって頭を突き合わせてやれる大人、すぐに答えを出してしまわない、そういったことを楽しむ元気な大人がたくさんいる町。それから大家族意識っていうものを取り戻してもらいたいと思うんです。

ありがとうございました。



スタンプラリー

まち並みウォッチング

STAMP RALLY

SCHEDULE

10月13日（日）10：00〜13：00

場所／豊前街道沿道

スタンプ会場／
1・お祭り広場（受付、昼食会場）
2・天聴の酒蔵
3・蔓薔薇
4・八千代座・夢小蔵
5・灯籠民芸館
6・千代の園
7・木屋食品
8・薬師堂
9・市民会館（投票所）

豊前街道をじっくり歩く
知らなかった山鹿を再発見

小雨のぱらつくなか「まち並みウォッチングスタンプラリー」が行われた。これは、豊前街道を歩いて楽しんでもらおうと企画されたイベント。山鹿市民や遠くは長崎市からの観光客ら約300名が参加し、保育園児や80歳の老人も豊前街道を思い思いに歩いていた。

1996
ARTPOLIS KUMAMOTO
STAMP RALLY
YAMAGA

友達と家族とスタンプラリーに出発！

今回のスタンプラリーは、豊前街道沿いの千代の園酒造や八千代座、灯籠民芸館、蔓薔薇など9カ所のスタンプ会場を回るというもの。スタンプ会場におかれたスタンプを所定の用紙に押し「アートポリス'96山鹿」という文字ができたらゴール。市民会館の投票箱に入れると、16時30分から行われる抽選で山鹿・鹿本地区の賞品がもらえる。順路も決められておらず、速さを競うわけでもないので、参加者たちは、自分のペースでゆっくり回ることができる。

大はしゃぎの小学生たち、お母さんに手を引かれた保育園児、夫婦連れ、老人グループなど、参加者たちはお祭り広場でスタンプ台紙と参加賞の食券を受け取ると、元気良く豊前街道をめざして出発した。

まず、江戸時代、関所であった"惣門"へ。門のそばに建つ千代の園酒造は、1896年創業の老舗の造り酒屋だ。ここでは、スタンプ会場というだけでなく、まち並み写真展を開催したり、酒造り工程の紹介も行われている。

千代の園酒造の4代目、本田雅晴さんは、江戸時代からある土蔵造りの米蔵を今も酒蔵として活用している。豊前街道の街並み保存の功労者とも呼べる人だ。「これらの建物は、後世に残したい大事な遺産。これからも保存し、どんどん使っていきたいと思っています。まちづくりに活用してもらえて感謝しています」と本田さん。

今後も、シャッターを格子戸にしたり、徐々に昔の姿に戻していきたいという。「もっと人が呼べるような施設になるよう、今ある酒の資料館に食事処を加え、複合的な施設にしたいと思っています。酒蔵コンサートを開くのも楽しいですね」と、まちづくりに積極的だ。

千代の園酒造と軒を連ねる木屋食品は、江戸時代からの麹屋。スタンプ会場であり、パネル展示会場でもあるため、入れ替わり立ち替わりたくさんの人が訪れていた。

友達と一緒に回っていた小学3年生の女の子は「この街並みを私も大切したいと思います。古いものが見られてうれしいです」と元気に街道を歩いていた。

豊前街道を北へ。無料休憩所「おやすみどころ」は、たくさんの子どもたちであふれていた。お年よりたちが、くじを作り、スタンプラリー中の参加者を歓迎。参加者たちの憩いの場所となっていた。

友達と競争するかのように駆けて回る子どもたちもいれば、のんびり散策を楽しんでいる家族連れも。小学6年生と3年生の2人の息子と参加していた女性は「20数年振りに山鹿に帰ってきました。昔のような賑わいはないけれど、古いものをアレンジして文化の香りのする街になっていますね。住みやすい街ですよ。欲を言うなら、子どもが遊べる児童館があるといいですね」と感想を話していた。

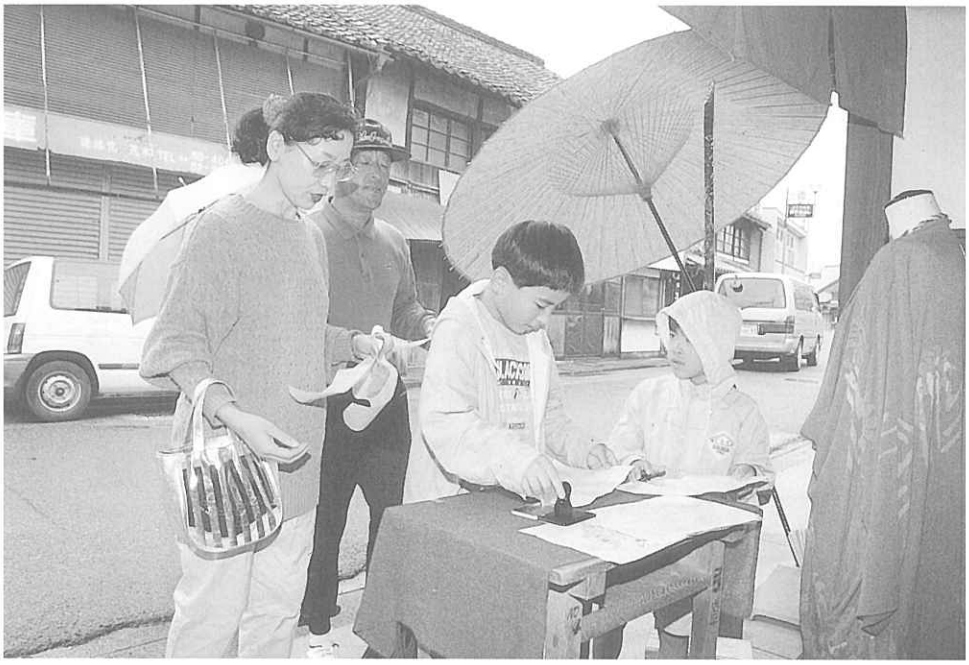
坂のデパートからレトロな坂へ
豊前街道、再び

さらに街道を北へ進路を取ると九日町に。昭和40年代ごろまでいろいろな店が軒を並べ、「坂のデパート」と呼ばれ、山鹿一の繁華街だったところだ。しかし、車社会の波が押し寄せたとき、道幅が狭いため渋滞が慢性化。買い物がしにくくなり客足が遠のき、加えて、複合商業施設「プラザ5」の建設で、急速に衰えていった。その中で商売をやめた人も少なくない。

今では山鹿灯籠民芸館として活躍する洋館は、大正14年に建てられた当時は銀行だった。しかし、時代を経て、今は山鹿の工芸品・灯籠を展示し、製作実演、体験ができる施設として生まれ変わった。

山鹿灯籠の源は灯火。第12代景行天皇の九州御巡幸の際、濃霧が立ち込め天皇一行の行く手をはばんだため、山鹿の里人が炬火（たいまつ）を手に道案内。以来、大宮神社に天皇をまつり、毎年灯火を献上したことが始まりと言われている。灯火が紙灯籠になったのは室町時代のこと。まず金灯籠に始まり、神殿造り、座敷造りと発展していった。灯籠民芸館は、これらの山鹿灯籠をいつでも見学できる施設として、山鹿の顔となった。山鹿灯籠と洋館。歴史ロマンあふれる組み合わせに人気が集まっている。

今回、スタンプ会場にも指定されてはいたが、スタンプラリー参加者だけでなく、たくさんの人が訪れていた。12日のオープニングイベントに参加していた観光客も「山鹿灯籠民芸館は素敵ですね」と声を揃えていた。



「蔵に眠っていたものがよみがえりました」

さらに坂を登り、八千代座を越えた所にあるスタンプ会場「蔓薔薇」へ。ここも時代とともに顔を変えた建物の一つだ。

「蔓薔薇」とは、平成8年4月にオープンした喫茶店兼雑貨店兼ギャラリー。主婦5人による店だ。入口には約100年前の暖簾が下がり、細長い、昔ながらの土蔵造りの店へ続く。昔は石けんや肥料などを売る卸屋として大活躍した江戸末期の商家を改造しての開店。店主である堀洋子さんは「どうせ改築するなら中途半端なものにはしたくない。昔の姿を残したくて」と、シャッターを格子にして、土壁も修理、なまこ壁も一つ一つ復元していった。そして、今回景観賞を受賞した。

「昔ながらのこんな建物が街道筋に並べばいいなと思います。でも、残念なことに空家が増えてしまって。縦に長い家だから住みにくいですしね」と、堀さんは、変わっていくまちを振り返る。「実は、ここも昭和49年の隣家の火事のもらい火で蔵が傷んでしまったんです。しかも、蔵を修理できる職人さんがいなくて、壊した蔵もあるんです」

しかし、今回の開店で、長い間眠っていたものがよみがえった。店内には、骨董の器や着物が飾られ、コーヒーや抹茶などは漆塗りの一人用のお膳に載せられて出てくる。コースター代わりの布、座布団も蔵に眠っていた古い着物を解いて作ったものだ。「建物でも道具でも、使わなくなったものをよみがえらせ、活用できる。やって良かったなと思います」と堀さん。メニューの一つ「べえろだご」も以前、この地方でおやつとして食べられていたものだという。「主婦5人が、洋裁、陶芸、書と趣味を生かしてしています。好きでやっていますから楽しいです」

また、喫茶店経営の傍ら、屋根裏では八千代座復元工事の基金になればと、近所の人の持ち寄りでリサイクルショップも開いたり、軒先では野菜も売っている。レトロな坂道、豊前街道にまた一つ山鹿の新名所が登場した。広々とした土間の「夏は暑くて冬は寒い」昔ながらの日本の商家がよみがえったのだ。

1996 ARTPOLIS KUMAMOTO STAMP RALLY YAMAGA

灯籠、酒蔵、温泉…山鹿の名所を一挙に回る

「灯籠民芸館」「八千代座・夢小蔵」「蔓薔薇」と豊前街道をさらに北上すると、「天聴の酒蔵」がスタンプラリーの折り返しポイント。この酒蔵は山鹿の人でもあまり知らない、忘れられつつある酒蔵だ。

太い梁と柱。昔ながら酒造りの道具も展示されている。よく見ると柱には落書きが…。そんな情緒たっぷりの蔵が壊されることなく残っていた。スタンプラリーに参加していた子どもたちの中には、そんな情景が気に入ったのか「もう一度行きたい」と言っている子もいた。

ボランティアガイドとして山鹿を案内している女性は、「お客さんからこの辺に食事処があるといいなあと、よく言われるんです。天聴の酒蔵や空き家などに食事処を作ってはどうですか」と提案。観光客の声も活かしたまちづくりをしたいという。「旅先案内人になるにあたって山鹿のことを勉強しました。灯籠の成り立ちや豊前街道のことを知って、もっと山鹿を好きになりました。『山鹿の温泉は世界一です』と紹介しています」とうれしそうに話していた。

さて、もうゴールは近い。「プラザ5」の桜湯のそばにある「薬師堂」へ行く。薬師堂は、山鹿の湯の守り神。文明期、金剛乗寺の宥明法印によって建立された堂だ。

「山鹿千軒たらいなし」と唄われるほどの湯量を誇っていた山鹿温泉が、文明5年3月に突如枯れた。困った菊池重朝公が、金剛乗寺の宥明法印に温泉復活祈願をお願いした。宥明法印は薬師堂を建立し、薬師如来12神像を安置。それから連日午前3時に起き、身を清め、不眠不休の祈祷に励んだ。すると、12月20日に湯が復活。それ以来、この日を「湯祭りの日」とし、宥明法印をたたえ、薬師堂を湯の守り神として大切にしてきた。現在も、温泉祭りの日には参拝者が絶えないほど市民の信仰を集めている。

スタンプラリーの参加者たちも、スタンプを押すかたがた参拝も忘れない。山鹿の豊富な湯に改めて感謝していた。

そして、次は最後のスタンプ会場、市民会館（投票所）へ。ここではスタンプ台紙に最後の文字「鹿」を押し、アンケートを記入後、投票箱へ入れる。これが16時30分からの抽選の投票用紙となる。

1996
ARTPOLIS KUMAMOTO
STAMP RALLY
YAMAGA

スタンプラリーの後はお楽しみの抽選会

16時30分からは、いよいよお楽しみの抽選会。13時から行われた「伝統と未来のまちづくり講演会」に出演者した常田富士男さん、小松一三さん、カール・ヘッセルさんたちのほか、関係者が抽選を担当。前列には、参加した小学生たちが並び、今や遅しと大盛り上がり。当選者の名前が呼ばれるたびに歓声が上がっていた。

当選者は34人。鹿北町からは岳間茶、菊鹿町からはハーブと押し花のセット、鹿本町からは来民うちわ、植木町からは植木すいか、鹿央町からはスイカとメロンの漬物と赤米のようかん、山鹿市からはせんべいの詰め合わせがそれぞれ5人に送られた。また、実行委員長からは山鹿灯籠、熊本県土木事務所からは双眼鏡、熊本県鹿本事務所からはキャンプ用ランタン、最後の目玉として山鹿市長から山鹿灯籠がそれぞれ1人に送られた。

植木賞を受賞した山鹿市在住の男性は家族4人で参加。植木スイカを手に「20年間、山鹿に住んでいながら、天聴の酒蔵など新たな発見がたくさんありました。いい機会でした」と話していた。「山鹿はいいところですね。今後は、道に標識をつけたりして人に来てもらえる街にしたいです。温泉プラス豊前街道で観光客がお金を落とす街になったらいいですね」と、これからの山鹿のまちづくりについても意見を述べてくれた。

市をあげての まちづくりが始まる

拾万円 氏名 願意等刻し回廊 内陣に掲げます
山 仏性院 金剛乗寺 中興三十四世 住職
成の瑠璃堂建立実行委員会」

スタンプラリーに参加した人たちは、いずれも満足そう。日頃見過ごしている山鹿の風景をゆっくり歩いて見ることで、地元のよさを改めて実感していたようだった。

小学三年生の女の子は「スタンプを押しながら山鹿をくるくる回れて楽しかった」、また別の女の子は「古い店とかいろいろあっておもしろかった。大切にしたいと思います」と感想を。親子3人で回っていた小学5年生の男の子は「普段入れないところに入れて楽しかったです」、その母親は「写真やパネルを見て、住んでいても知らない山鹿があるんだなと感じました。まちを知るいいイベントでした。でも、やはり繁栄していた昔と比べると寂しい感じはします。八千代座周辺には、古い街並みが残っていますが、それ以外はばらばら。通り全体が、昔みたいな街並みになれば」と、感想を語っていた。

まちづくりに大切なことは、まず、山鹿の人が山鹿を知ること。このスタンプラリーでは、そこに暮らしているからこそ見えていない部分を新たに発見することができた。時代の流れの中でさびれていった豊前街道に寂しさを感じている市民は多い。しかし、これから豊前街道を中心に山鹿が変わる。伝統が息づく新しいまちとして生まれ変わる。まちづくりの担い手となる参加者たちは、それを実感していたようだ。

EXHIBITION

アートポリス参加作品パネル展、豊前街道絵画展 etc

SCHEDULE

豊前街道絵画展・豊前街道シノラマ放映・山鹿傘展
10月12日（土）～18日（金）10：00～17：00
場所／天聴の酒蔵

明治のアートポリス
10月12日（土）～18日（金）10：00～17：00
場所／八千代座・夢小蔵

豊前街道まち並み写真展
10月12日（土）～18日（金）10：00～17：00
（18日は12：00まで）
場所／千代の園酒造

骨董看板展・鹿本郡市社寺仏閣パネル展
10月12日（土）～18日（金）10：00～17：00
（18日は12：00まで）
場所／木屋食品

パネルで、写真で、看板で…
明治時代の山鹿、これからの山鹿を見た

山鹿まちづくり展の期間中、豊前街道復興のきっかけとなった"明治のアートポリス"八千代座と夢小蔵の公開や、豊前街道の絵画展やシノラマ放映、骨董看板展など、往時の街道の姿をしのばせる展示会が開催された。道行く市民や観光客などが興味深そうに見学していた。

明治のアートポリス、八千代座
豊前街道復興のきっかけ、ここにあり！

明治のアートポリスとして、アートポリスの選定既存建造物に指定された八千代座。明治43年に建てられた八千代座は、廻り舞台やスッポンなど江戸時代の歌舞伎小屋の様式をとどめた全国でも数少ない芝居小屋。勾配をつけた見物席や、どの席からも遮るものなく舞台が見えるように柱をなくすなど、当時の建築技術をフルに生かして建てられている。八千代座は、戦後のテレビ普及などによって衰退、取り壊し寸前にあった。しかし、昭和63年国重要文化財に指定され、老人会を中心とした「瓦一枚運動」など、山鹿市民の活動で復興。平成2年からは歌舞伎役者坂東玉三郎の定期公演が毎年開かれ、全国からたくさんの人が訪れる芝居小屋として生まれ変わったのだ。

「八千代座には毎日行っていました。市民の憩いの場所でした。八千代座が復興してうれしい。また、あの賑やかだった姿を取り戻してほしいです」と、山鹿市在住、八千代座と同じ年のおばあちゃんが言った。

八千代座で案内人を務める塚本清行さんは、「お客さんに、ここに来て良かったな、と思ってもらいたいから」と、花道から歌舞伎役者のように「おっとっと」と現れ、八千代座を案内している。まるで花道から役者が出てくるような、ワクワクした気持ちにさせてくれる。

このように八千代座は、建物を保存するだけでなく、活用している。平成4年には八千代座の資料館『夢小蔵』もオープン。訪れた人が楽しめるよう、展示物やビデオ放映などのハード面と、案内人による説明などのソフト面の設備を充実させた。また、ここでは八千代座だけでなく周辺も楽しんでもらおうと、周辺の施設を含めた案内をしている。八千代座を軸に地域一体となったまちづくりが進んでいる。

現在、八千代座は平成12年3月までの修復工事に入った。これからも現役の芝居小屋として活躍するために。

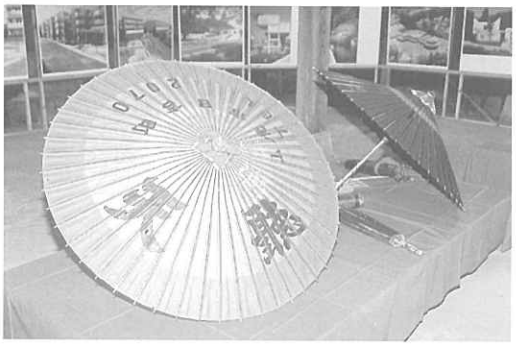
一度途絶えたものを復活
有効利用を考える

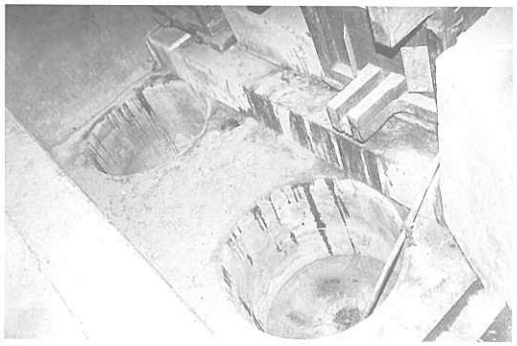
酒造としての営業はやめた天聴の酒蔵。ここでは、期間中、豊前街道のシノラマ放映とアートポリス参加作品のシノラマ放映、パネル展、服部秋彦氏の豊前街道絵画展が行われた。

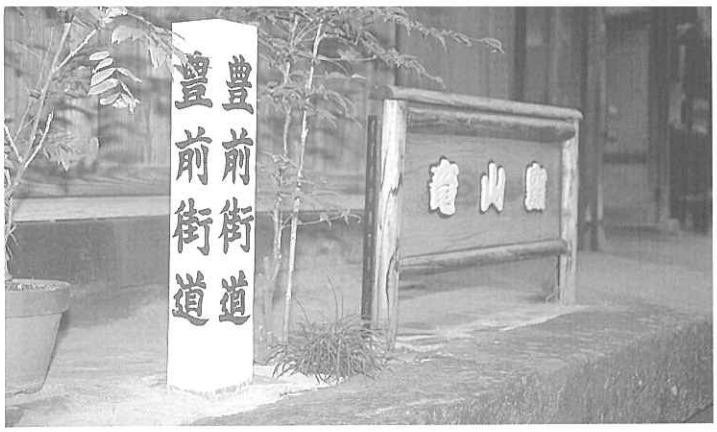
服部氏は、平成8年の1年間で山鹿の100景を描こうと、山鹿市内を歩き、スケッチをしている。今回は、その中でも蔓薔薇や八千代座など豊前街道を描いた8点を展示した。山鹿で生まれ、育った服部氏。「子どもの頃、友達の家に遊びに行く時や、温泉へ行く途中に見た柿の木、自転車に乗って転んだ坂…。生活の一部だった豊前街道を絵で残そうと思って描きました」と、写生の動機を語る。服部氏は、街を歩き、スケッチすることでいつもとは違う視線で山鹿を見ることができたという。飾り気のない素朴な街に独特の匂いを感じたのだという。「近代的なまちはどこも同じに見えるんです。山鹿は今のまま、特色のある街であり続けてほしいですね」と話してくれた。

同じく天聴の酒蔵では、山鹿傘も展示。山鹿傘は、明治時代に生産が始まり、大正中期から昭和初期にかけては年間50万本が製造されていたという。「山鹿灯籠は骨無しなれど骨が自慢の山鹿傘」と唄われるほどの山鹿の主力産業だった。しかし、戦後、服飾文化が洋風に変わり、洋傘に市場を奪われ、姿を消した。今は、その技術を伝える人もなく、産業として衰えてしまった。それが久々に日の目を浴びた。

一度、途絶えたものを復興させる。保存するだけではなく、それを活かす。天聴の酒蔵もギャラリーという形で再登場。眠っていたものをよみがえらせた展示会だった。そして、その裏には市民の復興にかける思いがある。八千代座の活動パネルを企画展示した八千代座桟敷会の城恵一さんと古閑泰隆さんは、八千代座の活用に奔走している。人権費をカバーしようとボランティアで活動中だ。今後は、八千代座だけでなく、天聴の酒蔵も有効活用したいと考えている。「例えば、天聴の酒蔵を200～300人ほどの小劇場にしたらどうか。八千代座までで帰らず、その先まで足を運んでもらえる施設にしたい」と夢を膨らます。「昔の遺産を大事にし、利用する。これで山鹿がかつての賑やかな姿を取り戻してくれたら…」。建物を中心としたまちづくりを計画中だ。







写真や看板を見て回る
いつもと違った視点でまちを歩く

豊前街道沿道は歩く骨董街。建物が骨董なら看板も骨董だ。山鹿共栄の「朝日舘」と書かれた松の一枚板のレトロな看板が、また新しい雰囲気を作り出し、木屋食品の看板は、築100年は経つであろう建物と相まって昔を物語っている。また、木屋食品では、骨董看板と同時に鹿本郡市社寺仏閣30のパネル展示と旧山鹿郡観音堂（33カ所）札所のパネル展示も開かれた。

豊前街道写真コンテストで入賞した13の作品は、千代の園酒造の蔵に展示。多くの人が見学に訪れていた。福岡から旅行に来たという女性は「こんな街並みの写真を見ていると気分ものんびりしてきますね。散策して帰ります」と楽しそうに見つめていた。

写真コンテストで最優秀賞に輝いた「街道散策」は大木国重さんの作品。九日町の「山鹿灯籠の店なかしま」付近でリュックを背負った女性とおばあちゃんの姿だ。山鹿市が目指す「古さと新しさの調和のとれたまち」を象徴するかのような風景だ。山鹿市民である大木さん自身も古いものを活かしたまちづくりを行ってほしいと考えている。「山鹿を思う私の気持ちとマッチした写真に仕上がりました」と受賞の喜びを語ってくれた。

今回、最年少の受賞者だった山鹿中学校3年の野口幸代さんと秋好美紀さんは、学校の社会科体験クラブの活動時の清掃風景の写真で入賞。「うれしいです」とかわいい笑顔を見せていた。これからの山鹿を担う彼女たちは、学校のクラブ活動を通して、郷土山鹿を知り、環境を守ろうと積極的に努力している。山鹿の未来についても「山鹿の温泉が好き。温泉と豊前街道を目的に全国から人が来てくれるようなまちになってほしい」という。

パネルや写真で山鹿を見ることで、いつもとは違う山鹿の姿を見た。もう見ることができなくなった山鹿傘や骨董看板なども見ることができた。山鹿を新たな目で見直すきっかけとなった企画展示だった。

Kumamoto Artpolis'96

Yamaga

山鹿まちづくり展

山鹿・鹿本地方の匠の技展

TAKUMI NO WAZA IN YAMAGA KAMOTO

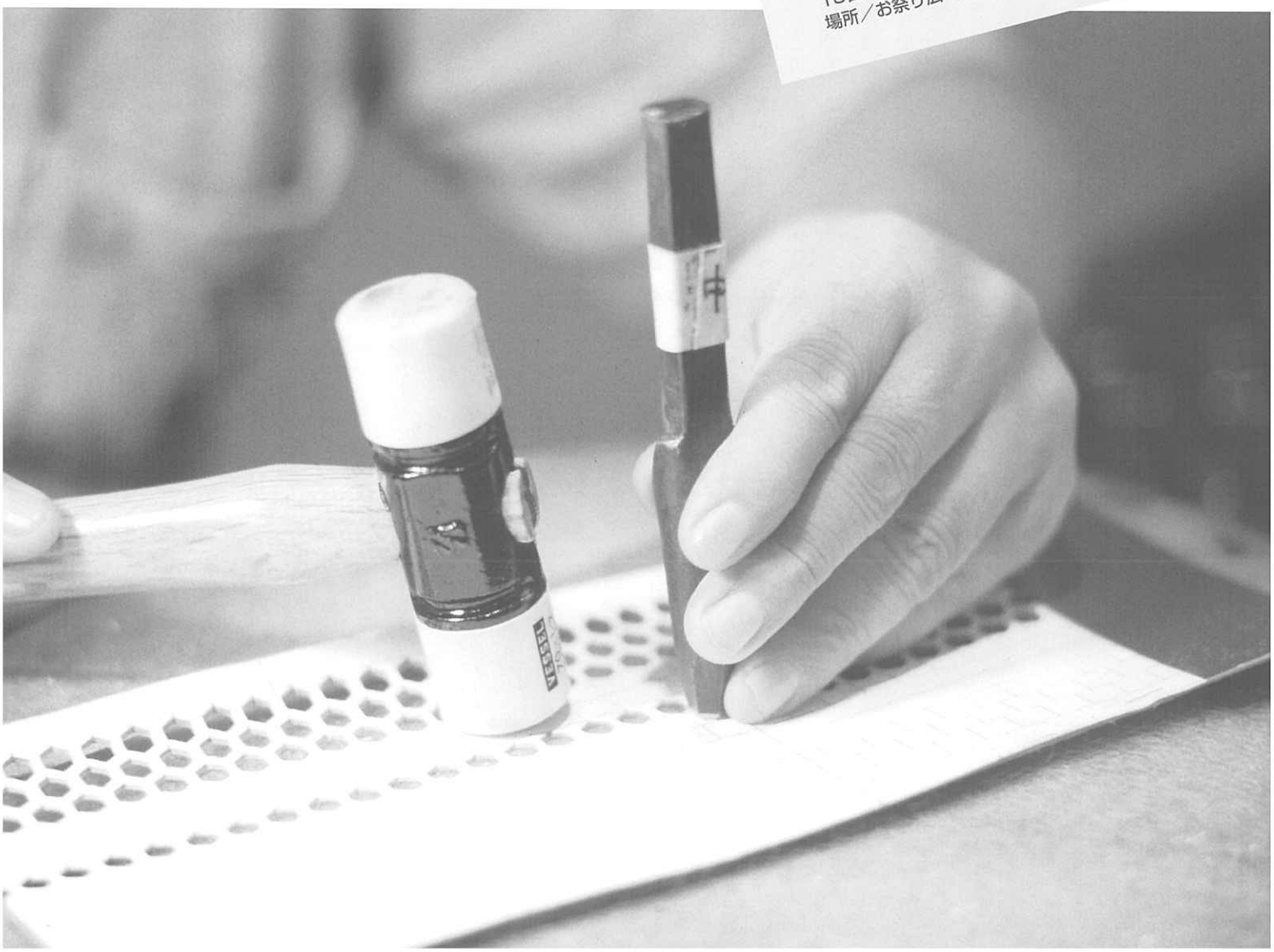
SCHEDULE

●灯籠製作実演
12日(土)～13日(日) 10：00～17：00
場所／山鹿灯籠の店なかしま・灯籠民芸館

●酒づくりの工程紹介
12日(土)～13日(日) 10：00～17：00
場所／千代の園酒造

●竹製品の製作実演・販売
13日(日) 10：00～17：00
場所／お祭り広場

●来民うちわ販売
13日 (日) 10：00～17：00
場所／お祭り広場

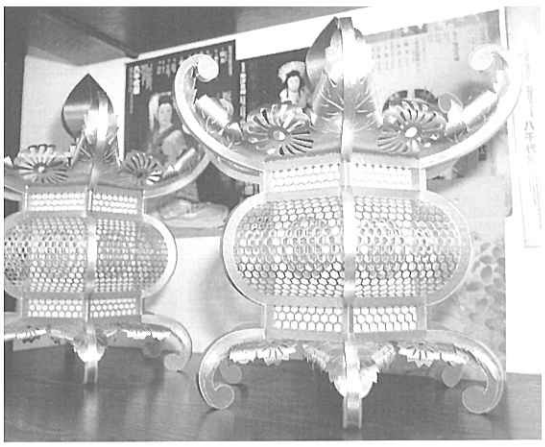


情緒たっぷりのまちなみで伝統工芸の製作風景に出会った

なかなか見られない伝統の技。山鹿の未来を考えた

和紙とのりだけで造られる山鹿灯籠、来民うちわ、酒、竹製品…。豊前街道のまちなみ同様、山鹿・鹿本には伝統的な工芸品も伝えられている。この匠の技展では、山鹿市内外の人に、地域に残る伝統の技を知ってもらおうと伝統工芸品の実演販売を開催。日頃見られることのない製作風景に出会えた貴重な2日間だった。

「山鹿灯籠を知ってもらえるだけでも良かったなって思います」



お祭り広場では来民うちわと竹製品、豊前街道沿いの「千代の園酒造」では酒づくりの工程紹介、「山鹿灯籠の店なかしま」と「灯籠民芸館」では山鹿灯籠を紹介。スタンプラリーの途中の人、ふらりと散歩がてらに立ち寄る人などが、日頃あまり見られない職人の手を興味深そうに見つめていた。

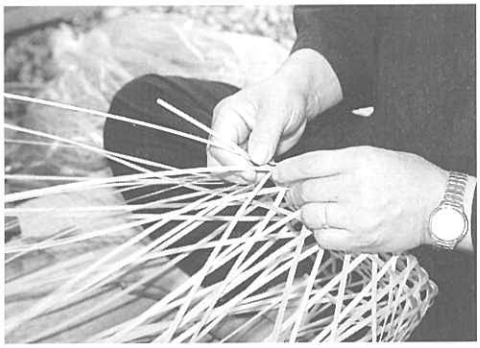
山鹿灯籠は「山鹿灯籠は骨なし灯籠」と唄われているように、和紙とのりだけで作られている。現在、灯籠師として活躍している人は3人、修行中の灯籠師は4人。灯籠師たちは、金灯籠や神殿などの製作に励んでいる。「山鹿灯籠の店・なかしま」を営む中嶋清さんは、親子2代灯籠師。「八千代座だけでなく、もっと山鹿を見てもらいたい」と平成2年に築100年の建物を改修。豊前街道の昔の面影をとどめる店構えにした。

実演は、イベント時だけでなく常時開催。毎日のように観光客や市民が訪れるという。「灯籠が和紙だけでできていることを知らないお客さんが多いんです。山鹿灯籠といえば灯籠娘が頭にのせた金色の灯籠だと思われていますが、あれは一部。神社だって社殿だって灯籠なんですよ。実演販売を始めてまだまだPR不足であることも感じました」。山鹿の財産である山鹿灯籠と豊前街道のまちなみを先祖から受け継ぎ、次世代へ。中嶋さんは、伝統のアートを守り続けている。

スタンプラリーのスタンプ会場やまちなみ写真展の会場でもある「千代の園酒造」。煙突がたつ江戸時代の蔵から明治、大正期の蔵まで瓦屋根の蔵が並んでいる。その中の一つ、酒造蔵で酒づくりの工程の紹介が行われた。ここでは、このイベント時以外も酒の資料館を開放。普段は、要予約で熊本の酒、赤酒や清酒などの酒造蔵を千代の園酒造の方の説明付きで見学できる。展示室には、酒づくりの工程表や千代の園酒造の歴代酒ラベルや昔、使用していた酒づくりの道具も設置。スタンプラリーの途中で訪れた市民の方は「近くに住んでいてもなかなか入る機会がなくて。楽しめました」とうれしそう。旅行途中や散歩がてらに訪れた方もいたようだ。また、人気の試飲コーナーでは、ちょっと一杯と、豊前街道めぐりの休憩ポイントとして利用している姿も見られた。

一方、お祭り広場のテントの中で行われた竹製品の実演販売はスタンプラリー帰りの小学生たちの人気の的。退職して竹製品作りを始めたという富永忠治さんの細かい手仕事に「どうやって作るの？」など質問しながら見入っていた。富永さんは、あいにくの雨にも負けず「楽しいですね」と黙々と作り続けていた。

残念ながら、雨天のため来民うちわは販売のみ。しかし、「豊前街道沿いの空き家を利用してハンドメイドのみやげ屋を作ってみては」という市民の声も聞かれ、市民に“ふるさと山鹿”を考える機会も与えたイベントであったようだ。



Kumamoto Artpolis'96

Yanaga

山鹿まちづくり展

豊前街道寺子屋塾

TERAKOYA

10月18日(金)14:00〜16:00

場所／天聴の酒蔵

築百年の酒蔵で豊前街道の歴史をたどる

豊前街道
寺子屋塾
BUZEN KAIDO

山鹿まちづくり展の最終日、
十月十八日十四時から天聴の酒蔵で「豊前街道寺子屋塾」が開かれた。
「山鹿と豊前街道〜山鹿の背骨・豊前街道〜」と題した、
熊本の郷土史家荒木栄司さんの講演に、
若い人から九十歳のおじいちゃんまで山鹿市民を中心に約八十名が集まった。
講演後には質問や議論が飛び交い、楽しいうちに幕を閉じた。

お茶とお菓子をいただきながら

太い柱に、天井にはりめぐらされた梁。土の床の会場にはイスが並べられ、今はもう途絶えた山鹿の伝統工芸品、山鹿傘が展示されている。会場は、築100年は経つ天聴の酒蔵。まさに、"寺子屋"にぴったりのロケーションだ。参加者も顔見知りが多く、また、講演の中休みには、お茶とお茶菓子がふるまわれるなどリラックスしたムード。

まず、司会者の挨拶。観光ガイド雑誌「くまもとの旅」などを発行している末吉駿一さんが司会を担当した。

今年、80歳になる荒木さんは、熊本市での講演後、90ccのバイクで若々しく山鹿入り。フサフサした白髪頭に眼鏡が似合う、作家の故司馬遼太郎に似た風貌の持ち主。司会者の末吉さんは「司馬遼太郎亡き後は荒木先生の時代がくるのではないか」と紹介し、会場からは笑いがもれた。

荒木さんは「今日は、街道筋・山鹿のことを少し話したいと思います。豊前街道を考えていただいて、今後の山鹿のまちづくりについてみなさんのアイデアを募れたらと、思っています」と挨拶。本題へ移った。

菊池川の水運と豊前街道の陸運が発達した宿場町

まず山鹿の歴史的地理を考えてみたいと思います。

当時、大和朝廷の人々は、巡幸を行うなどして全国の地理を認識しようと考えていました。山鹿もしかり。山鹿灯籠の由来ともなった景行天皇の巡幸が行われました。その「景行伝説」を見ると、当時すでに大和朝廷が山鹿の地理を認識していたことが分かります。山鹿は盆地ということで、本来、人が集まり、文化が発展する要素がありました。たくさんの人にその存在を知られていたから、人が集まっていた、ということも言えます。

また、その「景行伝説」には菊池は登場しませんが、玉名と山鹿は登場します。菊池川を使って巡幸したのに「景行伝説」に菊池が登場しないのは、山鹿の文化の光があまりにも強くて見えなかったからではないでしょうか。いずれにしても、山鹿は、古くから人々に知られていた都市だということが言えます。

山鹿のまちの特徴は「宿場」と「湯」。しかし、山鹿には、ほかの宿場町とは違う大きな特色がありました。菊池川の流れ。つまり水運業です。そして豊前街道という陸の道がありました。山鹿は、川の道と陸の道が交差した宿場町なのです。つまり山鹿は、大坂・江戸からの行き帰りの船が必ず通るまちでした。これは山鹿の発展の大きな要素であったと思います。

現在は、菊池川を利用した水上交通というものはありません。しかし、当時、山鹿は菊池川のおかげで、たくさんの人が集まってきていました。

また、山鹿にいかにたくさんの人が集まっていたかということは船の数を見ると分かります。江戸時代は、戦のため、いざというときに船を何艘調達できるかを調べておく必要がありました。福岡の筑後川流域にも、水運で栄えたまちがありますが、それらのまちの船の数を見てもだいたい山鹿の方が2～3倍多い。陸上交通があり水上交通があり、大坂・江戸からの行き帰りに人が寄る。山鹿に定住している人は少なかったとしても、山鹿に集まる人数というのは、ほかの宿場町に比べて倍くらいあったと考えられます。八千代座のように大きな芝居小屋があるのはそのせいかもしれませんね。

熊本城から江戸へ―
参勤交代の第一の宿場町だった

最近よく、歴史的なまち並みー街道筋の宿場町の風景を生かしたまちづくりがあちこちで行なわれています。山鹿もその一つですね。そこで次は、街道について話したいと思います。

肥後の場合は、城下町にある「札の辻」（現在の熊本市新町ＹＭＣＡの辺り／今も道路標識がある）という所が、交通の分岐点でした。札というのはつまり高札、今で言うならば掲示板。ここには道路標識が立っていました。「札の辻」を基点に南は鹿児島の薩摩街道へ。東は阿蘇を通り大分の方面へ行く豊後街道。それから北は小倉まで続き、黒崎港、瀬戸内海を渡って大坂まで上るという道がありました。しかし、この道だと時間がかかるし、瀬戸内海は渡し賃が高すぎるということで、後に、人々は豊後街道を通らず、豊前街道を通っています。

豊前街道の場合、熊本を出発して山鹿までほぼ六里。人が一日に歩く距離が約24ｋｍとされていましたから、宿場町は六里ごとに置かれていました。つまり、山鹿は熊本を出発して最初の宿場町でした。

少し話はそれますが、当時、実測技術がそこまで発達していなかったので一里の距離は藩によってバラバラでした。熊本ではだいたい４ｋｍ。でもなぜか一里木から二里木までは３・６ｋｍ。なかには一里の規定が４ｋｍ以上のところもありました。

さて、話を本筋に戻します。道は、昔も今も偉い人が通るときれいになります。この豊前街道も細川の殿様が通る時は、必ず全行程の水たまりに砂をかけ、道がデコボコにならないよう馬車は脇の土手を通らせるなどして道を整備しました。でも殿様が通るからといってすべての道が整備されたわけではありません。整備されたのは、参勤交代の大名行列が通る道だけで、ほかの道は構ってもらえませんでした。

熊本城を出発して豊前街道を辿ってみましょう。出発点である札の辻を出て、京町方面へ向かい、北上すると植木に着きます。植木は通称で、本来は「味取（みとり）」と言います。「味取」はもともと「身取」。「身取」という言葉は、昔、あの辺りがかなり急な坂になっていて、道が悪く、人通りも少なくて山賊が出たと言います。それで山賊から身を取られるから「身取」と言われていたのです。それがいつのまにか「味取」になったと言うわけです。本当かどうかは分かりませんが、豊前街道の中にもこういう危ない所があったんです。

それが参勤交代で殿様が通るようになって、整備されると、安全な道となります。みんな危険な道よりも安全な道を通りたいから、参勤交代の一行が通る道は、だんだんと人が増え、宿場町も発展し、その道のポイント、ポイントが栄えていきます。

山鹿は、第一の宿場町として発展していきました。水運と陸運を合わせ持つという、ほかの宿場町より多くの人が集まる要素を持っていましたからね。

さて、山鹿の町を通り抜けると熊入を通り、山鹿市立博物館がある鍋田の方から三加和、南関を抜け、大牟田は天領（幕府の直轄地）だったので避け、三池の番所・瀬高、飯塚を通って小倉に行きます。小倉は、今では福岡県となっていますが、当時は豊前の国。福岡県は筑前、筑後の国と北九州を中心とした海岸の町・小倉を中心とした豊前の国に分かれていました。

人が通るところに文化が生まれ、歴史が刻まれる

街道というのは人の通る道です。人の通るところに文化が生まれ、その文化が歴史的遺産として残ります。山鹿にもたくさんの文化が伝わり、歴史的遺産が残っています。伝わった文化だけでなく、山鹿にもたくさんの文化が生まれました。例えば、江戸時代には、原口ナカチという医者がオランダの砲術の本を翻訳しました。

これらの山鹿発の文化を山鹿の人が誇りに思い、もっと伝えていくべきです。遺産として役立たせるべきではないでしょうか。ほかにもたくさんのものが山鹿には埋もれています。山鹿市民であるみなさんが気をつけて掘り出せば、歴史、文化がたくさん残っているはずです。装飾古墳だけでなく、中世の豊前街道の文化や歴史を大切にしましょう。

熊本の街道といえば豊後街道の大津の杉並木。豊前街道はすぐに出てきません。それは、街道を守っている山鹿の人々の努力が足りないからなのではないかなと思います。私もこれからは豊前街道を宣伝していこうと思っています。でもその前に地元の人からいろんな話を聞かせてもらわねばなりません。私だけでなく、地元の人にも山鹿のことを知り、覚えてもらわなければなりません。歴史をつくるのが人ならば、その歴史を伝えるのも人。みなさん、一緒に山鹿の歴史をつくり、伝えていく努力をしましょう。

（第一部の講演は終了）

質問

「子どもの頃、親に聞いたのですが、山鹿の名の由来は、山鹿にはシカがいて、怪我をした鹿が湯につかっていたから山鹿の温泉が発見されたとか？」と八十歳のおじいちゃん。

そういう話はよくありますよ。もう少し詳しくお話しますと、殿様が山鹿に来て怪我をしたとき、ちょうど温泉に使って怪我を治すシカを見て、この温泉は治療に効くというのを知りました。これが山鹿の温泉の由来だと言われています。

さっき文化は人が作ると話しました。人は非常に大事なまちづくりの要素なんです。先程、私とお話した区長の有働さんは、佐々成正と共に頑張って戦った武士の子孫。山鹿には、そういう歴史的いわれのある人がたくさんいます。こういう人の歴史も大事なんです。何しろ歴史は人が作るものですから。歴史的ないわれのある人がたくさんいるということも山鹿の一つの強みではないでしょうか。

また、宿場町は火事が多いところ。だから山鹿には火除け地蔵、いわゆる火事を防いでくれる地蔵がたくさんあります。こういうものもみなさんが大事にしなくてはならないものの一つだと思います。ほかに、火下り地蔵、木登り地蔵というのもあったそうですよ。これらから分かることは、宿場町にとって火事の予防がいかに大事なことであったかということ。それを私たちに教えてくれた火除け地蔵は、大切な遺産の一つなのです。人吉に行って、観音さまを三十三体めぐるのもいいのですが、山鹿の地蔵さんをめぐるのもおもしろそうじゃないですか。しかし、これには町の方の協力がいります。どこに火除け地蔵があるのか、まちの人が分かっていないと、よその人が山鹿に来ても地蔵を見て回ることが出来ません。山鹿のように、これだけの火除け地蔵があるというのは近代都市にしてはめずらしいのではないかと思います。

山鹿には、ほかにもたくさんの遺産が残っています。金剛乗寺もその一つです。これは平安時代からある古い寺です。カーブした石の門がえらくカッコ良くて、あれなんかも宣伝してもいいのではないでしょうか。寺に残る話に、12月20日の「湯祭の日」があります。この湯止めの伝説をもっと飾りたてるといい観光資源になると思います。

「湯祭の日」とは一度枯れた温泉が復活した日のことです。百姓が牛を温泉に浸けたら温泉の神様が腹をたててお湯を止めてしまい、温泉が枯れてしまったとか。

困った町民のために金剛乗寺のお坊さんが一生懸命お経を上げたら仏様の念力で、また温泉が湧くようになった、それが12月20日なのです。

山鹿に住むみなさんは「今更こんな話をしなくても」と、思われるかも知れませんが、ほかの地域の人にとっては、魅力あるおもしろい話なのです。そもそも郷土史として残るおもしろい話というのは、ちょっとバカらしい話の集積なのですよ。

温泉だって昔からあるもので、何も京都、奈良から流れてきたものでなく、神様に発見してもらうまでもなく、山鹿の人はみんな知っていました。でもそんなことを言っていたら話になりませんよね。そんなふうに地元の人から見たらバカらしいことでも、ほかから見たら立派な観光資源というものが多々あるのです。例えば水前寺公園や本妙寺。熊本市民が「おもしろくない」と言ってそれらを一生見に行かないというのと同じです。私が熊本市の方に聞いてみても、行ったことがないと言う人が結構いますよ。また、山鹿にはたくさんの歴史史実があります。例えば大宮神社。ここは灯籠をまつった神社として有名ですが、戦国期には竜造寺の戦いもあったところなのです。でも今では竜造寺家の戦いといえば三加和町となってしまって…。三加和町に大事な観光資源を取られてしまっているんですよ。

歴史を後世に伝える
分岐点にさしかかった

今回の参加者は年配の方が多く、荒木さんも顔負けというくらい、山鹿のことを知っている人ばかりだった。にぎやかな時代を知っているだけに、この豊前街道復興への思いは人一倍。

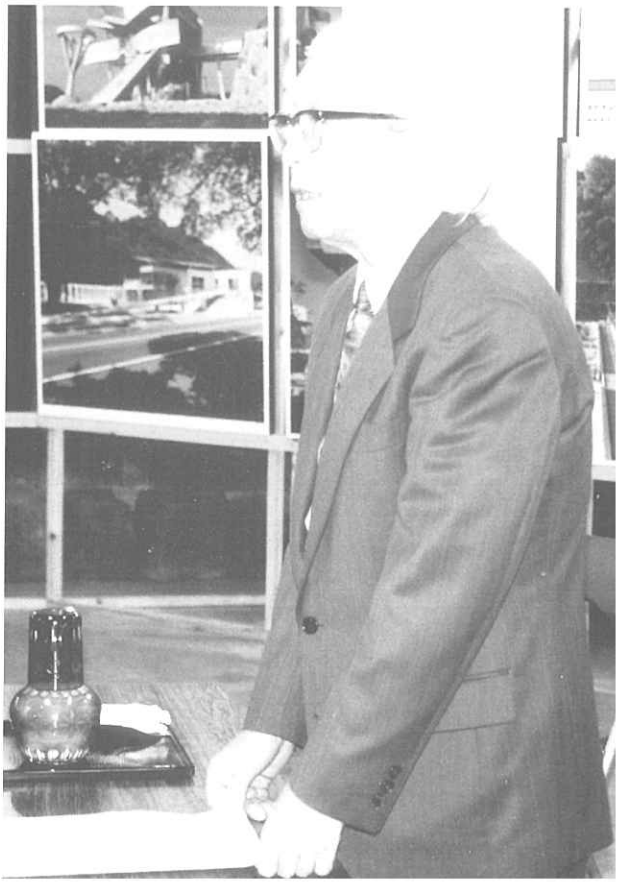
「知らないうちに、大切な観光資源を自分たちの手でつぶしてしまっていたんですね。先生の話を聞いてもっとがんばらなくてはと思いました」

「山鹿には、以前3つの浴場がありました。その1つ、御前の湯の天井には龍の絵が描いてあったんです。その龍が湯船に映ると、まるで龍が温泉を泳いでいるような雰囲気でした。今はその龍の絵は別のところにあるのですが、これを何とか今ある桜湯の天井にもってこれないでしょうかね」などと、これからの山鹿について語っていた。

「昔を今に伝えるには、今が分岐点だ」と言い切る荒木さん。また末吉さんも「今後、歴史の建て直し、文化、歴史を守り育てていこうということだと思います。長い歴史の線上に我々がいて、その延長線上に子どもたちがいます。未来は歴史の延長線上にあるのですから、今を伝えていきたい」と語る。

山鹿傘が姿を消したように、昔から伝わる山鹿の宝が少しづつ忘れ去られようとしている。山鹿の“生き字引”であるお年寄りたちが元気なうちに、山鹿の姿を後世に伝える努力が必要であろう。荒木さんは「これから年寄りが山鹿の姿を後世に伝える場を作ることも必要なのではないでしょうか」と提案した。

山鹿市民がまず自分たちの住むまちを知り、自分たちの手でこれからの山鹿をつくっていく。市民のまちづくりへの意識が芽生えた講演会だった。



山鹿まちづくり展

人が相集い交流するやさしいまちづくり

10月12日(土)～10月18日(金)

■主　催
熊本国際建築展「くまもとアートポリス'96」実行委員会

■主　管
熊本国際建築展「くまもとアートポリス'96」山鹿まちづくり展実行委員会
ふくしまつり「みんなの福祉を考えるつどい」実行委員会

■事務局
山鹿市役所（地域振興課）　☎0968-43-1111
☎0968-44-2111

くまもとアートポリス'96
山鹿まちづくり展
KUMAMOTO ARTPOLIS'96 YAMAGA CITYPLANNING EXHIBITION

1997年3月発行

編集・発行　熊本国際建築展「くまもとアートポリス'96」実行委員会
事務局：熊本県土木部建築課内
〒862-70　熊本市水前寺6丁目18-1　TEL 383-1111

企画・制作　株式会社熊日広告社、有限会社エアーズ
デザイン　株式会社フォリオ

印　刷　凸版印刷株式会社

○総合記録
○都市デザインサミット
○熊本まちづくり展
●山鹿まちづくり展
○阿蘇まちづくり展
○清和むらづくり展
○泉むらづくり展

KUMAMOTO ARTPOLIS '96